



大学教育再生加速プログラム

平成26年度文部科学省採択
大学教育再生加速プログラム

令和元年度報告書 (最終年度)

大学教育再生加速プログラム(AP)
[テーマ I・II 複合型]

Active Learning and Beyond



宮崎国際大学

2020年3月発行

目次

はじめに	1
1. 宮崎国際大学 AP 事業	
1.1 事業の概要	2
1.2 事業の目的	2
1.3 最終年度（令和元年度）の事業目標	3
2. 令和元年度 事業計画	6
3. 令和元年度 事業実績	
3.1 事業計画①	
新入生オリエンテーション	7
3.2 事業計画②	
タブレット貸出しの案内	9
タブレット端末オリエンテーション	9
3.3 事業計画③	10
3.4 事業計画④	
1 年次 e ポートフォリオ・オリエンテーション	14
2 年次 e ポートフォリオ・オリエンテーション	15
3.5 事業計画⑤	
大学教育学会第 41 回大会	17
全国語学教育学会（JALT）国際大会	18
3.6 事業計画⑥	
国際教養学部 of DP 達成度評価システム	19
国際教養学部のカリキュラム・マップの分析	20
語学資格試験（TOEIC）実績	25
国際教養学部 of PDCA サイクル	27
3.7 事業計画⑦	
アクティブ・ラーニング手法（国際教養学部、教育学部）	28
英語学習に効果的な AL 手法について	33
教員が用いる AL 手法の調査	39
クリティカル・シンキングに効果的な AL 手法について	41
3.8 事業計画⑧⑩	
アクティブ・ラーニング事例集の作成	46
英語教育セミナー：小中高大におけるアクティブ・ラーニングの事例発表	48

3.9 事業計画⑨	
FD 研修会（第 5 回 AP-FD、7 月 26 日）	52
第 4 回 FD 研修会（9 月 17 日）	53
BEVI 研修会（第 6 回 AP-FD、1 月 10 日）	54
FD 研修会（第 7 回 AP-FD、1 月 14 日）	55
3.10 事業計画⑩	
AP 事業北九州合同セミナー（六大学共同開催）	56
AP 最終年度全体報告会（武蔵野大学有明キャンパス、東京）	60
3.11 事業計画⑪	62
4. AP 事業（平成 26 年度～令和元年度）の成果概要のまとめ	63
5. AP 事業の目標達成	73

はじめに

平成 26 年度に採択された文部科学省の「大学教育再生加速プログラム (AP)」は、本年 6 年間の最終年度となりました。テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」とテーマⅡ「学修成果の可視化」の複合型の本学での取組は、最初の 4 年間は 4 つのワーキンググループによって活動を行ってきましたが、最後の 2 年間は個々の活動を一つに統合することで実施しました。

宮崎国際大学では、グローバル社会で活躍できる人材の育成という教育目標の実現のために、本学 AP 事業で次の 5 つの目標を掲げました。①AL (アクティブ・ラーニング) のベスト・プラクティスの明確化と発達、②CT (クリティカル・シンキング) を客観的に測定・評価するツールの開発、③英語スキルを向上させる AL プログラムの構築、④e ポートフォリオを用いて学修成果の可視化、⑤ルーブリック・ベース・シラバスの導入による学修 PDCA サイクルの確立。これらの 5 つの目標は、本報告書にお示ししましたように、一定の成果を収めることができました。

今年度実施した「英語教育セミナー ～小中高大におけるアクティブ・ラーニングの事例発表～」では、文部科学省教科調査官の富高雅代氏をお招きしご講演いただきました。また、県内の小学校、中学校、高等学校からのアクティブ・ラーニングの事例発表を総括する形で、本学のカタリーナ・モーク准教授が、種々の授業手法についての受動的授業と能動的授業の分類を行い、それらの両要素が授業には不可欠であることについて模擬授業形式で講演しました。県内の学校から参加された 94 名の教員の方々からは、大変参考になり、継続して学びたいとの声が聞かれました。このセミナーは、本学 AP 事業で 6 年間取り組んだ内容が、地域の小学校、中学校、高等学校に貢献できることを実感できる機会となりました。

6 年間を振り返ると、学修成果の可視化や CT 測定等、長い模索の時期もあったように思います。その度に、教職員と AP 事務局さらに、学生が一体となって、一つひとつの課題をクリアしてきました。特に、AL 改善のための学生グループが作成した「アクティブ・ラーニングに効果的に取り組むための学生の心得」は、新入生に配布され、学生グループの代表者が本冊子の作成意図や内容等について説明する等、AP 事業に学生が参画したことによる大きな成果であります。

AP 合同セミナーや AP 外部評価委員会による評価、学会発表など、本学事業の推進には多くの方々からのご協力を頂きました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

本報告書の刊行を通じ、本学の AP 事業が日本の教育界に貢献できることを願っております。

6 年間という長きにわたり、学内外の関係する皆さまにご支援・ご協力をいただきましたことに、改めて心からの感謝を申しあげます。

令和 2 年 3 月

宮崎国際大学
学長 山下恵子

1. 宮崎国際大学 AP 事業

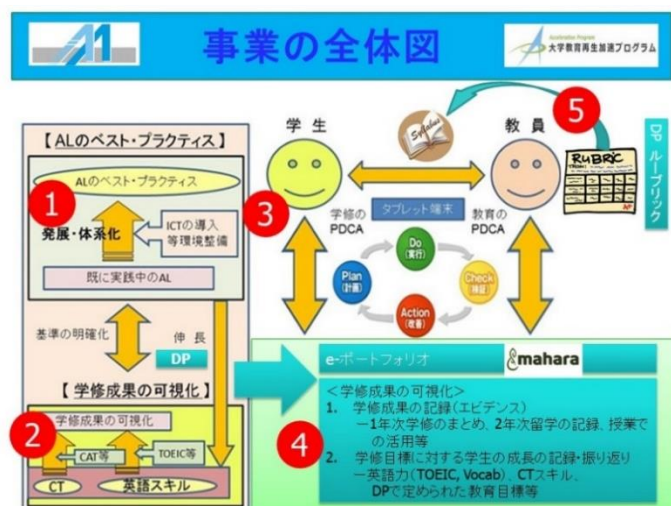
1.1 事業の概要

宮崎国際大学は、グローバル化社会において活躍できる人材の育成という教育目標の実現のため、20年前の開学当初からほぼ全ての授業で英語を用いたアクティブ・ラーニング（以下、ALと呼ぶ。）を実施する特色ある教育を行ってきた。今回採択された本学の取組は、これまでの教育実践を基盤に、本学教育の主要な学修成果であるクリティカル・シンキング（CT）と英語スキルの可視化を行い、これらの修得を最大化させる AL 手法の開発、実践及び体系化を行うものである。本事業は 1) これまで実践してきた AL のベスト・プラクティスの明確化、2) このことと関連して CT と英語スキルの可視化、3) AL と CT 及び英語スキルの対応関係をルーブリック・ベース・シラバスにより視覚化と学修の PDCA サイクルを確立の 3 つの特徴がある。

1.2 事業の目的

宮崎国際大学国際教養学部は、開学以来国際的リベラル・アーツ教育を軸にほぼ全ての授業を英語で行い、また AL を導入している。文部科学省の平成 20 年 12 月答申「学士課程教育の構築に向けて」で謳われている学士力の養成には、AL の導入が不可欠になっている。しかし、これまでの取組では、効果的な AL に必要な CT の技能をはじめ、AL による学修成果を可視化する客観的な測定・評価が不完全であり、また AL をさらに発展させるための物的資源の環境整備が整っていない等、不十分な点があった。そこで、本事業では、次の 5 つの取組を包括した事業を展開することで、本学教育のさらなる質向上を目指すことを目的とする。

- ① 従来の AL をさらに発展させ、ベスト・プラクティスの明確化と達成を目指す
- ② CT をプラクティスの明確化と達成を目指客観的に測定・評価するツールを開発する
- ③ 英語スキルを向上させる AL プログラムを構築する
- ④ e-ポートフォリオを用いて学修成果の可視化を行う
- ⑤ ルーブリック・ベース・シラバスの導入による学修の PDCA サイクルを確立させる



1.3 最終年度（令和元年度）の事業目標

最終年度（令和元年度）の目標を、今までの取り組みを参考にして立案した。

目標①：AL のベストプラクティスの明確化と発達

目標③：英語スキルを向上させる AL プログラムの構築

【今までの取り組み】

AL の実態把握及び体系化

- ・ 教員へのインタビュー及び授業観察を通じて、宮崎国際大学で教員が使用している AL の手法を AL の特性に応じた 33 種類に分類した。
- ・ 平成 28 年度～平成 30 年度は、国際教養学部で教員が頻繁に使用している AL の手法に関する調査を実施した。本学で頻繁に使用している AL の実態把握及び体系化に向けての活動が始まった。
- ・ 平成 30 年度以降は教育学部でも AL アンケートを実施し、全学的な AL 実態を把握した。

FD 研修を通じた AL に関する学内意識・技術の促進

- ・ AL ワーキンググループによる FD 研修は、毎年、約 2・3 回実施され、アンケート調査の結果報告や効果的な AL の手法の紹介を行うことで、本学教員への AL に対する知識及び指導力向上および教育改善に役立てた。

効果的な AL の特定及び普及、効果的な AL プログラム構築に向けて

- ・ 平成 30 年度に、これまでの AL の手法の把握及び体系化への取組をさらに発展させるため、教員が授業で使用している AL の手法の実践事例を集め、CT 能力及び英語力に焦点を当てた AL の事例集を作成した。また、事例集を学内共有するためのホームページを立ち上げ、教員の AL の実践力を向上させる仕組みを整備した。
- ・ これまでの AP への取組を、学生の視点から効果的に享受し活用するための方策を考える「AP 学生グループ」を立ち上げた。主体的学修を促進するためにはどうすればいいのか、学生自身が検討し、AL の授業への効果的な取組方法をまとめた冊子「アクティブ・ラーニングに効果的に取り組むための学生の心得」を発行し、新入生に配布した。

【今年度（令和元年度）の目標】

- ・ ベスト・プラクティス AL のクリティカル・シンキング（CT）および英語スキルに対する効果を、学生へのアンケート調査で分析を行い、学生にとって効果的な AL 手法（ベスト・プラクティス）を明らかにする。また、AL の事例を、教育学部まで拡大して事例集を作成して、公開する。

目標②：クリティカル・シンキングを客観的に測定・評価するツールの開発

【今までの取り組み】

CT テスト開発に向けての活動

- ・ CT のアセスメントテストを開発した米国テネシー工科大学のワークショップに教員を派遣して、CT のテストに対する知識を深めた。

- ・ ワークショップで得た知見を基に、宮崎国際大学独自の CT テストを開発した。
- ・ 平成28年度にテスト初版を作成し、数名の学生によるパイロットテストを実施した後に、国際教養学部学生へのテスト実施を開始した。テストで使用される言語は英語で、第二言語としての英語で学修する国際教養学部の教育環境に合わせたテストとなっている。英語力を測定するテストとならないように、テストに使用される英語の難易度なども議論し、テストを改訂した。
- ・ 初期データの分析を基に、7種類の CT 能力を測定するテスト第2版が平成29年度4月に完成した。その後も継続的に CT アセスメントテストを実施している。
- ・ テストは計26問の選択式の問題で、学生は一定の文章を読み、質問に対して4択の中から1つ正解を選ぶ。7つの能力に沿った能力を測定するように、テストは作成されている。
- ・ 本学のクリティカル・シンキングは、①重要な情報の特定、②情報の正確性を見極め、③問題解決の方法と攻略法、④情報の分類化、⑤多面的思考、⑥情報の活用、⑦演繹的推論の要素からなっている。

妥当性・信頼性のあるテスト開発及びテストの活用方法の特定

- ・ 継続的にテストを実施し、その結果の分析・検討を継続して行うことで、データの蓄積を図り、必要に応じてテストを改訂し、2019年度に最終版を完成させる。
- ・ CT能力の育成に焦点を当てたALの手法のFD研修会を実施し、テストが測定するCT能力と授業で実践するALにより育成するCT能力を対応させた。
- ・ 本学でのCT能力をテストにより可視化し、また、その能力を授業でのALによって育成するという土台が構築し、学生のCT能力の効果的な育成に役立つ。

【今年度（令和元年度）の目標】

- ・ CTアセスメントテスト2019年度版（最終版）を用いて、本学でのCT能力を測定する。また、2018年度データとの比較によってデータ解析を行う。

目標④：eポートフォリオを用いて学修成果の可視化

【今までの取り組み】

eポートフォリオの構築

- ・ eポートフォリオシステム（ムードル及びマハラ）を構築した。
- ・ eポートフォリオ使用法のFD研修によって教員がeポートフォリオの知識を深めた。
- ・ 学生に対してeポートフォリオ・オリエンテーションを実施し、操作説明を周知している。
- ・ eポートフォリオ使用の普及活動を行った結果、ALのエビデンスを含めたeポートフォリオがリベラル・アーツ入門、世界市民、ICT入門、キャリアデザイン、一部の英語の授業に導入された。
- ・ 英語力ページ、国際教養学部1年生および2年生の留学ページが導入された。

eポートフォリオの活用

- ・ 継続的に、新入生及び在学生へのオリエンテーションを行い、使用方法を適宜指導した。
- ・ 本学での4年間の学修を通じた有効活用を目指し、3年次のまとめページ及び4年次の卒業論文ページの開発を行った。

- ・ 学修外時間管理プラグイン、DP で定められた学修成果を可視化するためのレーダーチャートやフロントページなど、更なる e ポートフォリオ活用の準備を進めた。

【今年度（令和元年度）の目標】

- ・ 学生に 40 項目の DP ルーブリックについて e ポートフォリオで自己評価させる。また、カリキュラム・マップに従って、学生の成績を DP ルーブリックに割付けて、成績上での DP ルーブリックの達成度評価をするシステムを構築する。

目標⑤：ルーブリック・ベース・シラバスの導入による学修 PDCA サイクルの確立

【今までの取り組み】

共通ルーブリックの作成および改良

- ・ 国際教養学部学修成果ルーブリックに含まれる項目の教員への調査が行われ、その結果、国際教養学部共通ルーブリックが作成され、シラバスに導入された。
- ・ このルーブリックの概要説明及び授業での活用法に関する FD 研修が行われ、教員間でのルーブリックに対する認識が向上した。
- ・ 本学と同じ AP 校でルーブリックを先進的に活用している関西国際大学でのルーブリック活用を視察・意見交換することで得た知見を基に、これまでの本学でのルーブリック活用を改善した。ディプロマ・ポリシー (DP) に関連した 5 つの項目である Advanced Thinking (高度な思考力)、Global Perspective (国際的な視野)、English (英語力)、Japanese (日本語表現力) 及び IT Skills (情報通信技術) の各項目に対し、8 つの具体的な能力を測定する文章を作成し、合計 40 の小項目 (5DP×各 8DP ルーブリック = 40 DP ルーブリック) で DP に関わる能力・資質を自己評価するシステムを導入した。

DP ルーブリック 40 項目の達成度の測定

- ・ DP の達成度を測定する 40 項目を使用し、入学直後と 1～4 年次末に、学生は自己評価を実施した。
- ・ 教員が各授業科目で扱う DP の項目を明確にすることで (40 項目を使用したカリキュラム・マップの作成)、授業で 40 項目の育成を目指した教育を提供し、学生及び教員の両方から大学全体で学修目標を到達させるように取り組んだ。
- ・ 2019 年度には、40 項目の自己評価結果を e ポートフォリオに組み込み、学生自らが DP で示された教育目標の達成に向けた PDCA を行える土台を完成させる。

【今年度（令和元年度）の目標】

- ・ DP ルーブリックの達成度を学生の自己評価と学生の成績の両面から測れるシステムを構築する。
- ・ 各授業の目標を 40 項目の DP ルーブリックに割り付けたカリキュラム・マップを 2018 年度に作成した。2018 年度に作成した暫定カリキュラム・マップでは、全体で 2200 の DP ルーブリックが選ばれたが、DP ルーブリック毎で偏りがある。そこで、カリキュラム・マップについての指針を作成する。

2. 令和元年度 事業計画

本年度の目標を達成するために、AP 事業最終年度(令和元年度)の事業計画①～⑫を立案した。各計画の事業実績を第3章に示す。

計画 番号	令和元年 事業計画①～⑫
①	国際教養学部の新入生に対して、本学の DP で定められた学修目標を説明し、自己評価を行うオリエンテーションを開催する(4月)。
②	希望する新入生にタブレット端末を貸与すると共に、その基本的な使用方法についての説明会を開催する(4月)。
③	国際教養学部の学生に対してクリティカル・シンキング・テストを適宜実施し、結果を分析することでテストを完成させる(4～3月)。
④	e-ポートフォリオの目的や使用方法の指導を行う e ポートフォリオ・オリエンテーションを国際教養学部の1年生及び2年生に対し実施する。また、必要に応じて、適宜、e ポートフォリオの指導を e ポートフォリオ・センターで実施する。
⑤	AP 関連のシンポジウムやアクティブ・ラーニング及び学修成果の可視化をテーマとした学会やフォーラムで本学の取組を対外的に発表する。また、その該当学問分野の研究者及び専門家と意見交換をする(4～3月)。
⑥	自己評価で活用している DP ルーブリックを成績評価と関連づけ、自己評価と成績評価の2つの側面から、学生の DP で示した教育目標の達成を測定する仕組みを構築する(4月～8月)
⑦	アクティブ・ラーニングに関するデータを分析した結果を教員間で共有するとともに、アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスの一定のモデルについて議論し、理解を深め、その精度の向上を図る(7月)。
⑧	教員が授業で使用しているアクティブ・ラーニングの手法で、クリティカル・シンキング及び英語力に焦点を当てたアクティブ・ラーニングの指導事例を教員から収集する(8月)。
⑨	これまでの取組の成果を教員に報告する FD 研修会を実施する。これまでの取組全体の教育効果や AP 事業終了後の取組の継続などに関して、教員と議論し意見をもらう(12月)。
⑩	収集したクリティカル・シンキング及び英語力に焦点を当てたアクティブ・ラーニングの指導事例をまとめた事例集を作成する(1月)。
⑪	AP 事業の成果全体を発表する報告会を他の AP 校と合同開催し、本学の AP 事業の総体的成果を学外に発表する(2月)。
⑫	本学の AP 事業の取組の成果をまとめた最終報告書を作成し、関係諸機関へ送付する(3月)。

3. 令和元年度 事業実績

3.1 事業計画①

国際教養学部の新入生に対して本学の DP で定められた学修目標を説明し、自己評価を行うオリエンテーションを開催する。

新入生オリエンテーション

平成 31 年 4 月 1 日～4 日に新入生オリエンテーションを行いました。4 月 3 日の入学式前までの日程では、TOEIC テストや奨学金説明会等を行い、4 日のオリエンテーションでは、国際教養学部は教員・担当教科の紹介のあと、各教室をローテーションで回り専門教科についての概要説明を受けました。その後、履修登録説明、アドバイザー教員のグループごとに分かれ履修相談を行いました。翌週から本格的に始まる大学生活を前に緊張の面持ちも見られましたが、先輩や先生と話し、説明を受けることで少しずつ慣れていく様子が見受けられました。



教科説明（国際教養）



アクティビティを交えた説明を行う教科



履修相談（国際教養）



履修相談（国際教養）

教育学部は、勉強方法の説明や、奨学金説明、キャンパスツアーを行いました。



勉強方法、小幼・幼保コース共通部分の説明



キャンパスツアー（図書館）



キャンパスツアー（学食）



キャンパスツアー（理科室）

また、4月5日には、国際教養学部に入学者を対象のオリエンテーションも行われました。日本での生活に関する説明や学内で行われる MIC ワールドカフェ（留学生と日本人学生の交流会）についての説明などを行いました。



留学生対象オリエンテーション

3.2 事業計画②

希望する新生にタブレット端末を貸与すると共に、その基本的な使用方法についての説明会を開催する。

タブレット貸出しの案内

宮崎国際大学では、文部科学省の大学教育再生加速プログラム（AP）事業の一環として e ポートフォリオ活用および授業と課外学習でのアクティブ・ラーニング活用を目的として 1 年生（令和元年度入学生）の希望者に下記のタブレット PC を貸与します。基本的にはタブレットを充電した状態で授業に持参するようにして下さい。各授業での使用有無については先生方の指示に従ってください。

- ① 貸与タブレット端末仕様 **Lenovo YOGA Tablet 2 with Windows**
モデル：YOGA Tablet 2-1051F:WLAN
システム：Windows 8.1 with Bing CPU: Intel Bay Trail T Z3745 (4 コア、1.33GHz)
カメラ：8 メガピクセル AF(背面)+1.6 メガピクセル HD [前面]
液晶：10.1 インチ、Bluetooth キーボード付
- ② タブレット端末を使用するにあたっては貸与規定及び利用関連注意事項を厳守して下さい。
- ③ タブレット端末が故障・破損した場合は速やかに下記 e ポートフォリオセンターに連絡をして指示にしたがって下さい。
- ④ 自分でタブレット又は PC を購入した方は、購入次第直ぐに、借りているタブレットを e ポートフォリオセンターに返却して下さい。
- ⑤ タブレット端末利用中に困ったことやわからないことがあれば、e ポートフォリオセンターに速やかに連絡して下さい。（2019 年 4 月 12 日）

タブレット端末オリエンテーション

2019 年 4 月 10 日（教育学部）、12 日（国際教養学部）に、タブレット PC の貸与を希望する新生に対するタブレット・オリエンテーションを開催しました。このオリエンテーションでは、タブレット PC 操作方法を説明し、貸出を行いました。タブレット PC は、授業内外での学生のアクティブ・ラーニングを更に充実させる為に、AP 事業の一環で購入しました。授業内での活用はもちろんの事、授業外でも Moodle（学習コース管理プラットフォーム） や Mahara（e ポートフォリオ）、そして教員や学生同士でのコミュニケーションなどで頻繁に利用されています。タブレット PC を有効活用し、本学での学修がより充実したものになることを期待します。



↑ 教育学部 ↓ 国際教養学部



3.3 事業計画③

国際教養学部に対してクリティカル・シンキング・テストを適宜実施し、結果を分析することでテストを完成させる。

CT 要素

宮崎国際大学のクリティカル・シンキング（CT）手法は、①重要な情報の特定、②情報の正確性の見極め、③問題解決の方法と攻略法、④情報の分類化、⑤多面的思考、⑥情報の活用、⑦演繹的推論の要素からなっている。その CT 要素と内容について表 1 に示す。

表 1 CT 要素と内容

	CT 要素	内容
1	関連情報の見極め Identifying relevant information	- Assess the completeness/adequacy of information 情報の完全性/妥当性を評価する - Identify salient information 顕著な情報を特定する - Separate relevant from irrelevant information when solving a real - world problem 現実世界の問題を解決する際に、関連情報を無関係な情報から分離する - Identify and eliminate irrelevant information 無関係な情報を特定して排除する
2	情報の信頼性の評価 Evaluating reliability of information	- Evaluate sources of information – evaluating truth value of claims or premises 情報源の評価-要求または前提の真価を評価する - Evaluate sources of information – assessing reliability of agents 情報源の評価-エージェントの信頼性の評価 - Determine underlying presumptions or presuppositions 基礎となる推定または前提を決定する - Identify stereotype according to the cultural backbround 文化的背景に応じた固定観念の特定 - Evaluate the reliability of information or results 情報または結果の信頼性を評価する
3	手法と攻略法 Method & strategy	- Ask the right questions to understand a problem 問題を理解するために適切な質問をする - Determinine or understand appropriate atrategies for investigating or solving problems 問題の調査と解決のための適切な戦略を決定または理解する - Identify the need for or successfully refine methodological approarches 方法論的アプローチの必要性を特定するか、うまく改善する - Determine outstanding issues of concern – what remains for investigation after conclusions and reached 懸念される未解決の問題を特定する-結論の後に調査のために残って到達したもの
4	分類的思考法 Categorical thinking	- Explain why some things belong together and others do not いくつかは一緒に属し、他のものはそうではない理由を説明する - Identify salient information 顕著な情報を特定する - Ability to eliminate 排除する能力 - Categorise appropriately 適切に分類する - Identify similarities between different languages and culture 異なる言語と文化の類似点を特定する
5	見通しを持った思考法 Perspectival thinking	Determine possible interpretations – from different normative perspectives 考えられる解釈を決定する-さまざまな規範的観点から Determine possible interpretations – from different informational perspectives さまざまな情報の観点から可能な解釈を決定します

		• Evaluate the effects of conclusions/judgement on different parties – moral imagination 結論/判断がさまざまな関係者に与える影響を評価する– 道徳的想像力
6	適用と評価 Application & evaluation	• Identify and evaluate suitable solutions for a real-world problem 実際の問題に適した解決策を特定して評価する • Develop a new way to solve an old problem 古い問題を解決する新しい方法を開発する • Evaluate the impact of new information and revise conclusions accordingly 新しい情報の影響を評価し、それに応じて結論を修正する • Explain how changes in a real-world problem situation might affect solution 現実世界の問題状況の変化が解決策にどのように影響するかを説明する • Implement knowledge about (intercultural) communicative competence (異文化間) コミュニケーション能力に関する知識を実行する
7	推論 Deduction	• Evaluate conclusions from premises 前提から結論を評価する • Arrive at a logically certain conclusion after evaluating results/evidence, and/or multiple results and lines of evidence 結果/証拠または複数の結果と証拠を評価した後、論理的に特定の結論に到達する

方法

- 1) CT テストは、1 年生に対して 7 月に、3、4 年生に対しては 11 月に実施した。2 年生は留学期間中であることから実施されていない。
- 2) CT テストは英語で作成され、学生は 26 問の質問について 4 つの選択肢から正しいものを選んで答える。
- 3) 採点は 26 点満点で行う。質問 1～26 番と CT 要素との関係を表 1 に示す。回答した学生数と得点分布を表 2 に示す。

表 2. 回答数と得点分布

		実施年		試行試験		本試験	
				2016	2017	2018	2019
回答者数 (人)	1 年生			50	21	43	108
	2 年生			0	0	0	0
	3 年生			23	42	47	18
	4 年生			23	6	17	20
	計			96	69	107	146
得点 (点)	平均値			11.7	12.1	11.9	10.2
	最高値			23.0	23.0	21.0	21.0
	最低値			4.0	4.0	3.0	1.0

表 3 各学年の平均点の推移

	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	平均
1 年生	10.2	10.2	9.8	9.2	9.9
3 年生	14.3	12.4	13.1	13.1	13.2
4 年生	12.6	16.7	13.8	12.5	13.9

解析

- 1) 図1には、2019年実施の全学年の成績分布を示す。CTテストは、多くの学生に対して行われ、その得点分布が正規分布を示していることから、難易度が中程度のテストと言える。
- 2) 表3に、2016年から4回行ったCTテストの学年の平均点を示す。その結果、学年が進むにつれて平均点が上昇していることが分かる。4年間平均値は、1年生時の9.9から4年生では13.9まで1.4倍に向上している。
- 3) CT能力が高学年になるにつれて向上していることを示している（図2）。

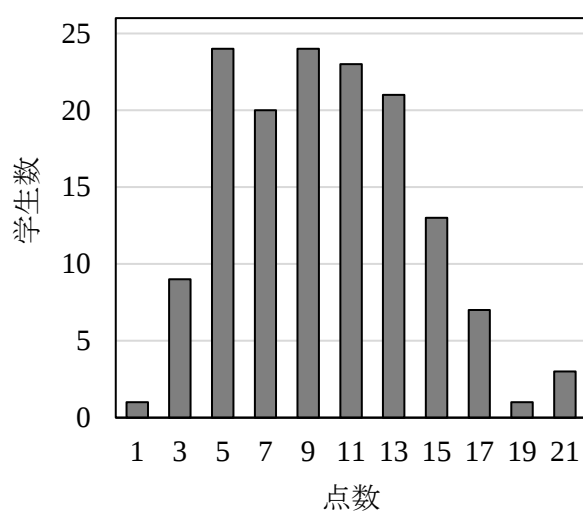


図1 成績分布（2019年度）

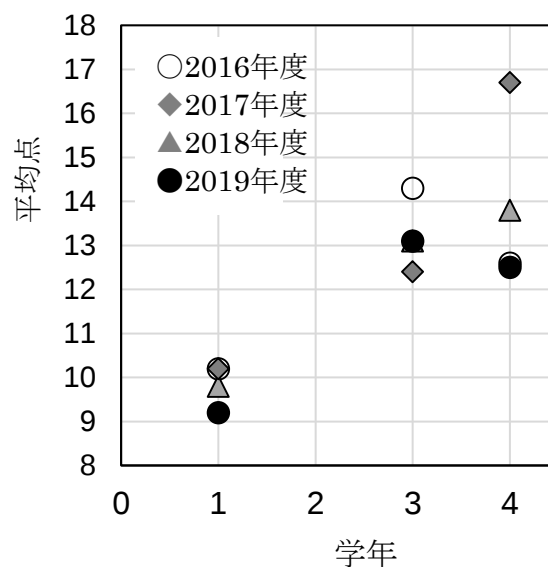


図2 平均点の推移

表 1. 質問とクリティカル・シンキング能力との関係

質問		関連情報の見極め Identifying revelant information	情報の信頼性の評価 Evaluating reliability of information	手法と攻略法 Method & strategy	分類的思考法 Categorical thinking	見通しを持った思 考法 Perspectival thinking	適用と評価 Application & evaluation	推論 Deduction
1	Eggplant				◎			
2	Driving				○		◎	
3	Fossil fuel		○			◎		
4	New heaven	◎						
5	Influenza		◎					
6	Sick school	○		◎				
7	Aquarium							◎
8	Accident		◎			○	○	
9	Noedwell				○	◎		
10	Hockey							◎
11	Europa		◎					
12	Baseball							◎
13	Tom&Ken	○				◎		
14	Tom&Ken					○	◎	
15	Mushroom			◎	○		○	
16	Mushroom			◎				
17	Symotims				◎			
18	Symotims			○	◎		○	
19	Symotims			◎	○	○		
20	Order							◎
21	Order	◎		○				
22	Order	◎						
23	Kangaroo		◎					
24	Kangaroo	○					◎	
25	Kangaroo					◎		
26	Kangaroo						◎	

3.4 事業計画④

e-ポートフォリオの目的や使用方法の指導を行う e ポートフォリオ・オリエンテーションを国際教養学部 の 1 年生及び 2 年生に対し実施する。また必要に応じて、適宜、e-ポートフォリオの指導を e ポートフォリオ・センターで実施する。

1 年次 e ポートフォリオ・オリエンテーション

冊子「AL に効果的に取り組むための学生の心得」の配布および説明

1 年次 e ポートフォリオ・オリエンテーションを 2019 年 5 月 22 日に開催した。これに合わせて、平成 30 年度に学生グループが作成した冊子「アクティブ・ラーニングに効果的に取り組むための学生の心得（下記は冊子の表紙）」を新入生に配布し、作成した学生グループの代表者が、本冊子の意図や内容、講義を円滑に受講するための方法などについて説明をした。



2 年次 e ポートフォリオ・オリエンテーション

2019 年 6 月 6 日（木）に、e ポートフォリオ説明会を開催し、国際教養学部 2 年生 66 名が参加しました。目的は、2 年次後期の海外研修 e ポートフォリオの作成方法の習得で、コンピュータを持参し、ワークショップ形式で説明会を実施しました。

2 年次には、以下の要件を含む文書を英語で作成し、e-ポートフォリオを作成します。

1. Area Studies (留学先の地域や文化に関する学習) 7500 Words (約ワードファイル 20 ページ)
2. English Section (留学中の英語学習に関する記録) 3750 Words (約 10 ページ)
3. Independent Study (自分で決めたテーマを研究) 3750 Words (約 10 ページ)

e ポートフォリオを有効活用し、主体的な学修ができることを期待します。



2 年次オリエンテーション（6 月 6 日）

3.5 事業計画⑤

AP 関連のシンポジウムやアクティブ・ラーニング及び学修成果の可視化をテーマとした学会やフォーラムで本学の取組を対外的に発表する。また、その該当学問分野の研究者及び専門家と意見交換をする。



大学教育学会第 41 回大会 (玉川大学、令和元年 6 月 1-2 日)

学修成果可視化の先にあるものとは

アセスメント文化の醸成

Visualizing Learning Outcomes and its Future —Fostering an Assessment Culture—

○藤木 清¹・○濱名 篤¹・○林 透²・○望月 雅光³・○大関 智史⁴

(¹関西国際大学, ²山口大学, ³創価大学, ⁴宮崎国際大学)

Kiyoshi Fujiki, Atsushi Hamana, Toru Hayashi, Masamitsu Mochizuki, Satoshi Ozeki

(¹Kansai University of International Studies, ²Yamaguchi University, ³Soka University, ⁴Miyazaki International College)

1. 中教審答申のねらいと今後の展望（関西国際大学 濱名）

2018 年の 11 月に出された中央教育審議会答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」は、「これから大学で学ぼうという高校生（中略）、人生 100 年時代を迎えこれからは見据えてもう一度学びたいと考えている社会人、さらに、（中略）留学生、そして現在高等教育機関で学んでいる学生に対し、『我が国の高等教育がこれからどう変化していくのか』を明らかにすること」を目的としていた（答申 1 頁）。内容的にグランドデザインと呼べるものが盛り込まれたとは必ずしも言えない。「学位プログラム」重視による学部横断的教育の実施、単位累積によるリカレント教育の推進、海外展開への促進など、規制緩和策が垣間見られたが、新たな方向性の選択は各大学に委ねられた。

ガバナンス改革も強調され、大学の連携・統合などによる経営力強化とそれが不十分な法人の市場から退場の方向性も明らかになった。学修成果の可視化と情報公開については、かなり踏み込んだものになっている。

学修成果の可視化と質保証については「各大学は、自ら設定した『三つの方針』に基づく教育について、その成果を評価するための質的水準や具体的な実施方法などを定めた方針を策定・活用し、自己点検・評価を実施した上で、教育の改善・改革につなげること」（答申 30-31 頁）の重要性が指摘された。PDCA サイクルは、大学全体、学位プログラム、個々の授業科目のそれぞれの単位で有効に機能している必要性にも言及されている。

他方、答申後、特別委員会が設置され検討が

進んでいる「教学マネジメント指針」の方向性によっては、各大学の個性化や特徴を制限しかねないリスクさえ含んでいる。

本ラウンドテーブルでは、受動的に情報公開を強いられるのではなく、能動的に学修成果の可視化と点検を、どのように自大学の教育改善や戦略構築につなげていくのか、アセスメント文化の醸成について協議する。

2. 地域人材育成プログラム開発を通じたアセスメントや学修成果（山口大学 林）

山口大学では、2015 年度に採択された文部科学省・地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）において、地域人材育成プログラム（「やまぐち未来創生人材（YFL: Yamaguchi Frontier Leader）育成プログラム」）を開発し、副専攻型の履修証明プログラムとして運用してきた。YFL 育成プログラムは、「YFL の 6 つの力（やまぐちスピリット、グローバルマインド、イノベーション創出力、協働力、課題発見・解決力、挑戦・実践力）」を学修目標として、原則として 1 年次から 3 年次に履修する階層的カリキュラムで、100～300 番のナンバリングを付し、各年次において授業科目組み込み型アセスメントを行ってきた。COC+事業で開発した履修証明プログラムというミニモデルを検討事例に、受講生の学修行動や学修到達度の実態を紹介しながら、アセスメントの意義や価値について考察したい。

3. アセスメント科目の実際と学生の成長プロセス（創価大学 望月）

創価大学経営学部では、AP 事業の採択に合わせて、アクティブ・ラーニング（以下、AL）

の質向上と学修成果の可視化を推進している。採択後、学部全教員を対象に授業設計研修（1泊2日）を行い（学長も参加）、本取組の理解促進と授業改善の方向性を明確にした。

学修成果の可視化については、アセスメントを行う科目を1年次、2年次、4年次にそれぞれ設定し、その授業内で大学共通のアセスメントを行う。学生は、この授業中に、目標設定や振り返りのためのワークシートとループリックへの記入を行う。これらの資料を使って学生は相互に評価し学びを改善するとともに、教員は授業ポートフォリオサマリーを作成し、授業の課題について授業改善のための会議（以下、同僚会議）を行う。同僚会議は、質問会議と呼ばれる手法を用いて、教員の同僚性を高めるようにしている。また同僚会議には他学部教員の参加も義務づけており、異なる視点で授業改善についての意見が得られるとともに、授業改善の内容が他学部にも波及できる。

DPについては各科目に紐付けており成績評価と関連づけて点検するとともに、卒業式終了後にDPの各項目について、その達成度を学生に自己評価させている。

4. DP達成度アセスメントとeポートフォリオの取組（宮崎国際大学 大関）

宮崎国際大学の国際教養学部では、英語によるリベラルアーツ教育が実施されており、ディプロマ・ポリシー（以下、DP）には、日英のコミュニケーション能力、高度な思考力、国際的視野などの5項目が含まれている。DPに掲げる学修成果の可視化の方法として、DPの5項目に関わる資質・能力をCan-doの文章で40項目に細分化し、DPの達成度を具体的に測定している。毎年、学生はこの40項目に対する自己評価を実施する。自己評価の結果は、各自のeポートフォリオ上でグラフ化され、学生は自分のDPの進捗状況に対する振り返り及び目標設定を行う。また、eポートフォリオには、TOEICや語彙力等の英語力を管理するページや、年度末に1年間の学修を振り返るページが導入され、DPの達成に向けた主体的な学修の実現を目指している。40項目を利用したカリキュラムマップを作成し、成績評価からのDPの達成度を測定することも検討している。

このように、DPの達成に向けた仕組みは整いつつあるが、主体的な学修につながっているかどうかの検証が必要である。また、DPの達成に向けた有効な学修支援の実施や、成績評価とDPの達成度との直接的な関連の妥当性の検証なども課題である。

5. アセスメントの実践科目による学生の成長プロセスの可視化（関西国際大学 藤木）

関西国際大学では、2006年より学修到達目標であるKUIS学修ベンチマークとeポートフォリオの導入により、学生自身が成長のプロセスを確認しながら学修を進めるPDCAの仕組みを構築してきた。その後、ループリックの導入やDPおよびアセスメントポリシーの策定を行い、PDCAの仕組みをより充実させた。

さらに、2016年には科目「評価と実践Ⅰ・Ⅱ」を開設し、社会人基礎力などの能力観や評価に関する知識を学ぶとともに上記の仕組みを学びの一環として4年間実践していくものとして位置付けた。具体的には、春・秋学期の初めに半年間の振り返りとベンチマークのチェック、そして次の半年間の目標とその達成のための活動予定の設定を行ったうえで、活動を行っていく。また、学期中には、教室での学びや経験学習を通して学んだことや身につけたことをレポートなどの成果物とともにeポートフォリオに蓄積する。

PDCAの仕組みを科目にしたことにより、従来よりもeポートフォリオの活用が進むなどの効果は見られるものの、最終的には4年間の学修の総合的な成果を自らの言葉で表現し、他者に伝えることができるようにしなければならない。そのための仕組みと学習プログラムとしての改善が課題である。

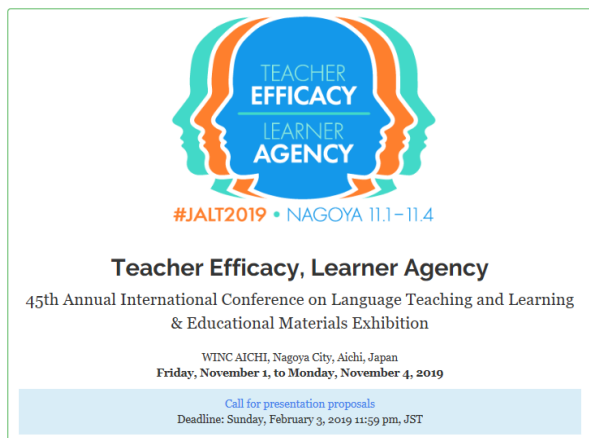
文献

中央教育審議会（2018）『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm）（2019年3月30日アクセス）



全国語学教育学会（JALT）国際大会 （名古屋市、2019 年 11 月 1-4 日）

本学の Rebecca Schmidt 先生、Ellen Head 先生、Alan Simpson 先生が、名古屋市 WINC で開催された「全国語学教育学会・第 45 回年次国際大会教材展示会」に参加しました。



学会のテーマは Teacher Efficacy, Learner Agency（教師効力感と学習者主体）でした。この大会は、教師の効力感を奨励し、学習者の主体を高めることは最強の組み合わせで、教員や学習者が成長していくための最善の環境について探求し、議論する場でした。本学の先生方は、「Mapping Student & University Learning Outcomes」というテーマで発表しました。その中で、Alan Simpson 先生が、本学の AP 事業のテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）とテーマⅡ（学修成果の可視化）の一環として取り組んでいる「学生の自己評価と能力育成の可視化」について発表しました。

現在、本学では、学生の自己評価と成績評価の両方をグラフ表示する機能を e ポートフォリオ上に追加し、学生の 4 年間の学びを自己評価と成績で DP ルーブリックを可視化する機能を開発し、ほぼ完成しました。今後、このグラフが学生へのアドバイジングのツールとして使われ、学生の能力育成に役立つことを期待しています。また、卒業時に渡される DP サプリメントにもこのグラフを記載することで、4 年間の学修成果を可視化できるよう検討しています。このような本学の取り組みを本学会で広く発信することができました。



3.6 事業計画⑥

自己評価で活用している DP ルーブリックを成績評価と関連づけ、自己評価と成績評価の 2 つの側面から、学生の DP で示した教育目標の達成を測定する仕組みを構築する。

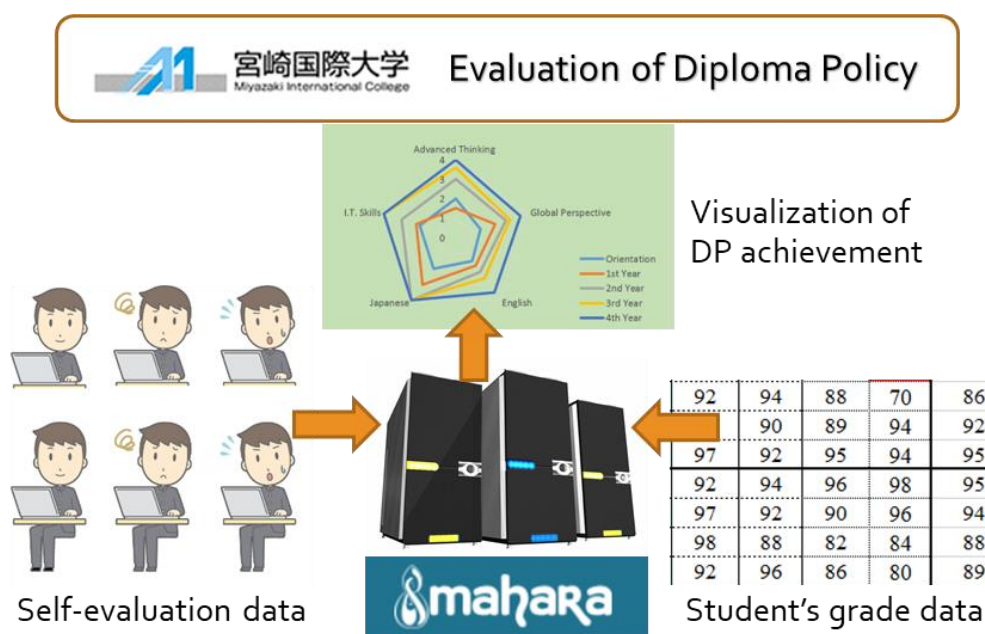
国際教養学部 of DP 達成度評価システム

ディプロマ・ポリシー（DP）の達成度を学生の自己評価と学生の成績の両面から測れるシステムを今年度構築した。具体的には、今まで e ポートフォリオに活用している Mahara® に、学生の各学年の成績を 40 項目の DP ルーブリックに割り付けができるプラグイン機能を付与し、学生が各学年終了時に行う自己評価の結果と合わせてレーダーチャートで表示できるようになりました。これらのデータを記載したディプロマ・サプリメント（学位証書補足資料）を卒業時に学生に手渡した。その特徴を下記に示す。

- ・ 学生が、40 項目の DP ルーブリックの自己評価を入学時・各学年の終了時の 5 回行う。
- ・ 大学が、各学年の終了時の学生の成績をカリキュラム・マップに従って 40 項目の DP ルーブリックに割り付けて評価を行う。
- ・ レーダーチャートで各学年の評点が重ならないようにするために、下表の様に各学年の評点に 0～3 点の加点をして、色分けした線で表した。学生の自己評価と成績の両方を同じレーダーチャートで表す場合は、学生の自己評価は線で、成績は面で表した。

時期	1 年次終了時	2 年次終了時	3 年次終了時	4 年次終了時
加点	0	+1	+2	+3

- ・ DP ルーブリック（8 項目）を 5 つの DP 毎に表したレーダーチャートと 40 項目の DP ルーブリック全体を表したレーダーチャートを用いた。



国際教養学部のカリキュラム・マップの分析

1. 背景

先行きの予測が困難な複雑で変化の激しい現在の社会において、個人の充実した人生と社会の持続的発展を実現するためには、一人一人がこれまで以上に自らの能力を磨き、高めていくことが不可欠である。そのための鍵として特に重要なのは大学教育である。大学には、学術研究を通じて新たな知を創造するとともに、自らの教育理念に基づく充実した教育活動を展開することにより、生涯学び続け、主体的に考える力を持ち、未来を切り拓ひらいていく人材を育成することが求められる。

このような大学教育への質的転換を図るため、各大学において「卒業認定・学位授与の方針：ディプロマ・ポリシー」、「教育課程編成・実施の方針：カリキュラム・ポリシー」及び「入学者受入れの方針：アドミッション・ポリシー」の三つのポリシーを策定することの重要性については、これまでも中央教育審議会における累次の答申等において指摘されてきた。

本学国際教養学部では、次に掲げる 5 つのディプロマ・ポリシー（DP）を策定している。

DP1: Advanced Thinking（高度な思考力） DP2: Global Perspective（国際的な視野）
DP3: English（英語力） DP4: Japanese（日本語表現力） DP5: IT Skills（情報通信技術）

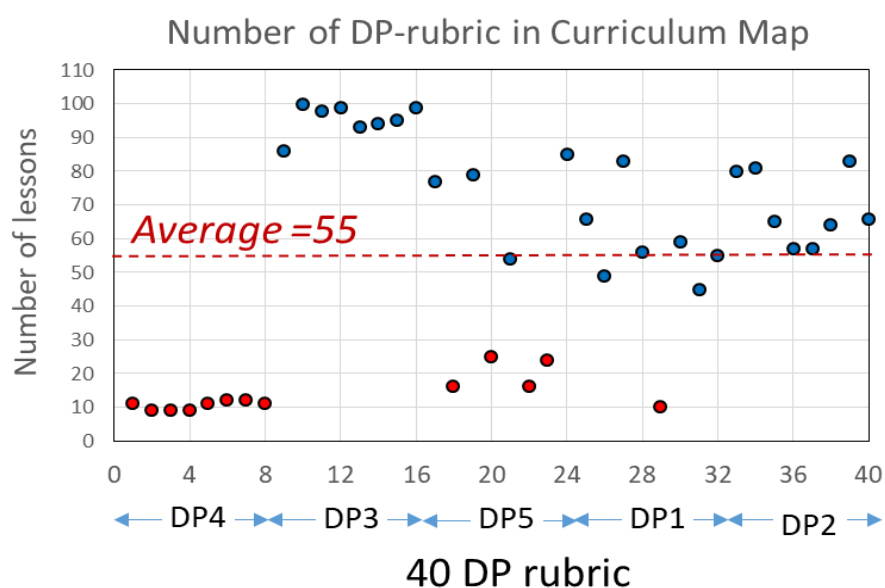
2. 本学の DP ルーブリック

5 つの DP に対して、具体的な能力を測定する DP ルーブリックを作成し、合計 40 の DP ルーブリック（5DP×各 8DP ルーブリック = 40）で DP の達成度を自己評価するシステムを導入して、40 項目の育成を目指した授業を提供し、学生及び教員の両方から大学全体で学修目標を到達できるように取り組む。

3. カリキュラム・マップの分析

各教員が、担当する授業科目に関係する DP ルーブリックを選び、選ばれた DP ルーブリックを授業ごとに一覧表にしたものを「カリキュラム・マップ」という。2018 年度に作成した暫定カリキュラム・マップでは、1) 全体で 2200 の DP ルーブリックが選ばれている。国際教養学部は 180 科目を開講しているので、1 科目当たり平均 12 個（=2200/180）の DP ルーブリックを選んでいることになる。また、2) 下図に示すように、各 DP ルーブリックに割り付けられた授業数は多いもので 100、少ないもので 9 と大きなアンバランスを生じている。これは、各教員が選んだ DP ルーブリックに大きな偏りがあるためである。国際教養学部の講義のほとんどが英語で行われているために、DP3（英語力）が多くなり、反対に DP4（日本語表現力）が少なくなることは予想されることではあるが、その差が極端である。また、文部科学省の次段階の施策として、DP ルーブリック毎の証拠（Evidence）を示すことが求められると思われる。そこで、根拠を示せない DP ルーブリックは選ばないことが重要である。

DP4		DP3		DP5		DP1		DP2		Average
JAP1	11	ENG1	86	CT1	77	CT1	66	GP1	80	55
JAP2	9	ENG2	100	CT2	16	CT2	49	GP2	81	
JAP3	9	ENG3	98	CT3	79	CT3	83	GP3	65	
JAP4	9	ENG4	99	CT4	25	CT4	56	GP4	57	
JAP5	11	ENG5	93	CT5	54	CT5	10	GP5	57	
JAP6	12	ENG6	94	CT6	16	CT6	59	GP6	64	
JAP7	12	ENG7	95	CT7	24	CT7	45	GP7	83	
JAP8	11	ENG8	99	CT8	85	CT8	55	GP8	66	
Sum	84	Sum	764	Sum	376	Sum	423	Sum	553	2200



Number of DP-rubrics	40	Number of lessons selected in DP-rubrics	
Number of lessons in SILA	180	Maxim	100
Total number of selected DP-rubrics	2200	Minimum	9
		Average	55

4.方策 (Guideline)

- 1) 文部科学省の次段階の施策として、DP ルーブリックの証拠 (Evidence) を示すことが求められると思われる。そこで、証拠を提示できる DP ルーブリックだけを選ぶように留意してほしい。
- 2) DP1 (高度な思考力) については、DP1 の中での割り付けを見直しして、CT5 の様な極端に少ない DP ルーブリックが出ないようにする。
- 3) 英語科目は、DP2 (国際的な視野) を選ばない。
- 4) DP3 (英語力) については、英語科目だけに限定して、英語以外の授業には DP3 に割り付けられない。
- 5) 英語教育では証拠を容易の準備できるとされるので、二つ以上の DP ルーブリックを DP3の中から選ぶことができる。もし、DP3 の DP ルーブリック 8 つ全てを選んだとしても、受

け入れるものとする。

- 6) DP4（日本語表現力）に割り付けた DP ルーブリックは現行のものをそのままにする
- 7) DP5（情報通信技術）では、ICT8 をもう少し少なくする。
- 8) 結論として、各授業の DP ルーブリックは 2 個ぐらいに留め、全体で 360 個（=2×180）、一つの DP ルーブリック当たり 9 個（=360/40）が適当と思われる。そこで、各教員が主（major）と副（minor）の二つの DP ルーブリックを選ぶことが適当である。

Supplementary Material A

Diploma policy (DP) and DP rubric of MIC

Diploma policy (DP)	40 DP Rubric	
	English	Japanese
DP1 Advanced Thinking 高度な思考力 【本学の DP】 ①クリティカル・シンキング（批判的・分析的思考法）をベースにした高度な思考（比較、分析、総合、評価）能力を身につけている。 ③課題発見及び問題解決能力を身につけている。	1. Think about data or evidence and make a logical conclusion 2. Think about conclusions that are based upon data or evidence, and decide if those conclusions are good or not. 3. Judge if I have all the information that is needed to make a good conclusion, and what other information might be required. 4. Avoid making mistakes in arguments, and identify mistakes that other people make. 5. Decide how accurate a conclusion is, using the evidence provided. 6. Use information from a variety of sources to decide what might be accurate. 7. Understand when and how things are related, and when they are not. 8. Decide if information or sources of information can be trusted or not.	1. データや証拠を考慮し、筋道の立つ結論に達する 2. データや証拠に基づいた結果を考慮し、その結果の善悪が判断をする 3. 良い結果を導くために、必要な情報がすべてあるか、他のどんな情報が必要かを判断する 4. 論議において、自分の間違いを避け、他人の間違いを見極める 5. 与えられた証拠から、結論の正当性を決める 6. 正確であろうことを決めるために、複数の情報源を活用する 7. 物事がいつ、どのように関連し、また、いつしないのかを理解する 8. 情報や情報源が信頼できるか判断する
DP2 Global Perspective グローバルな視野 【本学の DP】 ②日本文化と外国の諸文化に対する広範な知識とその比較を通して得た、高い異文化理解・受容能	1. Gather knowledge & form opinions about current events 2. Understand and share feelings of inequality 3. Understand and share feelings of cultural differences 4. Describe how my views on cultural differences & social inequalities have changed as a result of my increased knowledge of the world 5. Demonstrate knowledge, abilities & attitudes from my study abroad program through my study abroad portfolio 6. Summarize concepts of social science, general science and the humanities 7. Combine concepts of social	1. 時事に関する情報を収集し、意見をまとめる 2. 不平等に対する捉え方に共感し理解する 3. 文化的差異を理解し、共感する 4. 世界情勢に関する知識が増えた結果、文化的差異や社会的不平等に関する自分の考え方の変化を説明する 5. 海外研修ポートフォリオを通じて、海外研修中に培った知識や能力及び意識の変化を示す 6. 社会科学、人文科学及び総合科学の概念をまとめる 7. 社会科学、人文科学及び総合科学

力を身につけている。	science, physical science and humanities into a bigger picture	の概念を統合し、全体的な概念を作る
	8. Give a brief statement of the concepts of social science, general science and the humanities	8. 社会科学、人文科学及び自然科学の概念について簡潔に述べる
DP3 Japanese 日本語表現力 【本学の DP】 ④日英両語における高度なコミュニケーション能力を身につけている。	1. Present confidently	1. 自信を持って発表する
	2. Express ideas persuasively using spoken Japanese	2. 説得力のある考えを口頭で示す
	3. Make concise and complete answers	3. 簡潔かつ完全に回答する
	4. Write my ideas	4. 文章で考えを述べる
	5. Express my ideas about the text or discussion	5. 文章またはディスカッションに関する自分の考えを表現する
	6. Read critically	6. 批判的・分析的に読書する
	7. Find important points in texts for discussion	7. 討論のために読んだ文章の中で重要な論点を見つける
	8. Make interesting opinions about the texts and support my opinions with good reasons	8. ある文章に関する興味深い意見を述べ、論理によってその論点を支える
DP4 English 英語力 【本学の DP】 ④日英両語における高度なコミュニケーション能力を身につけている。	1. Speak clearly with a natural rhythm	1. 自然なリズムで明瞭に話す
	2. Speak accurately with appropriate vocab. for the situation	2. 状況に応じて、適切な語彙を用いて話す
	3. Initiate and maintain conversations	3. 会話を始め、維持する
	4. Write ideas with developed arguments	4. 証拠に基づいた論点をもって自らの考えを書面で表現する
	5. Use multiple grammar structures accurately	5. 複数の構文を正確に使用する
	6. Structure my text logically & coherently	6. 文章を論理的で筋道正しく構成する
	7. Read quickly & understand	7. 文章を素早く読み理解する
	8. Check my understanding by summarizing texts	8. 文章を要約することで、自らの理解度を確認する
DP5 Information Technology Skills 情報通信技術能力 【本学の DP】 ⑤情報技術活用能力を身につけている。	1. Use word processing software effectively	1. 文章編集ソフト（ワードなど）を効果的に使用する
	2. Use spreadsheet software	2. 表計算ソフト（エクセルなど）を使用する
	3. Interchange data among word processing, spreadsheet and presentation software	3. ワード、エクセル、パワーポイント間で、データを写す
	4. Save data, and manage files and folders	4. データを保存し、ファイルやフォルダーを管理する
	5. Make good quality presentation materials	5. 高度なプレゼンテーション材料を作成する
	6. Type quickly & use keyboard shortcuts	6. 素早くタイプしキーボードのショートカットを活用する
	7. Write business & personal emails	7. ビジネスや個人的なメールを作成する
	8. Find useful information on the internet	8. インターネットからの有用な情報を検索する

Supplementary Material B: Example of Curriculum Map

Diploma Policy Mapping Data

#	JAP1	JAP2	JAP3	JAP4	JAP5	JAP6	JAP7	JAP8	ENG1	ENG2	ENG3	ENG4	ENG5	ENG6	ENG7	ENG8	ICT1	ICT2	ICT3	ICT4	ICT5	ICT6	ICT7	ICT8	CT1	CT2	CT3	CT4	CT5	CT6	
ANT301	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☐	☐		
ANT303	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☐	☐		
ANT309	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☐	☐	☐	☐	☒	☐	☐	☒	☐	☐		
ANT3111	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☐	☐	☐	☐	☒	☐	☐	☒	☐	☐		
ART301	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐		
ART303	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☐	☐	☒	☐	☐	☒	☐	☐	☒	☒	☐	☒	
ART308	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☐	☒	☒	☐	☒	
ART3101	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☐	☐	☒	☒	☐	☒	
ASA	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☐	☒	☐	☒	☒	☐	☐	☐	☐	☒	☐	☐	☒	☒	☐	☒	☒	☐	☒	
ASA365	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☒	☒	☐	☒	☒	☒	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	
ASA366	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	
ASA369	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☐	☐	
ASA370	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☐	☐	
ASE353	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	
ASE356	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒
ASE358	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☐	☒	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☐	☒	☒	☐	
ASE360	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☐	☒	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☐	☒	☒	☐	
ASE361	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	
ASE362	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☐	☒	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☐	☒	☒	☐	
ASN351	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	
ASN354	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☐	☐	
ASN355	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☐	☒	☐	☒	☐	☐	☒	☒	☒	☒	☒	☐	

語学資格試験（TOEIC）実績

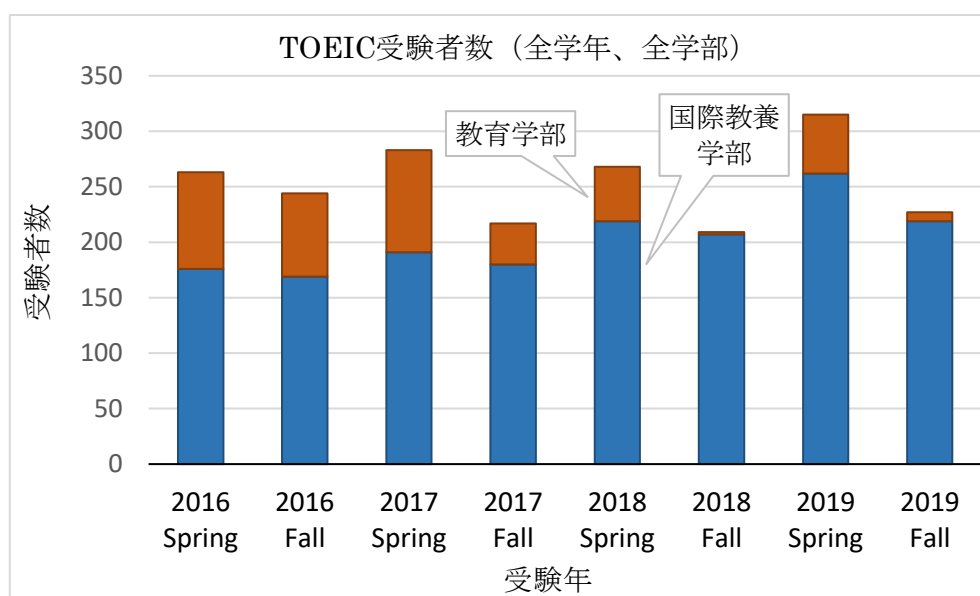
宮崎国際大学は、グローバル化社会において活躍できる人材の育成という教育目標の実現のため、開学当初からほぼ全ての授業で英語を用いたアクティブ・ラーニングを実施する特色ある教育を行っている。英語スキルは TOEIC によって評価しており、TOEIC は PDCA サイクルにおいて重要な評価項目となっている。ここでは、TOEIC の受験実績および成績の推移について示します。

1 TOEIC 受験者の推移

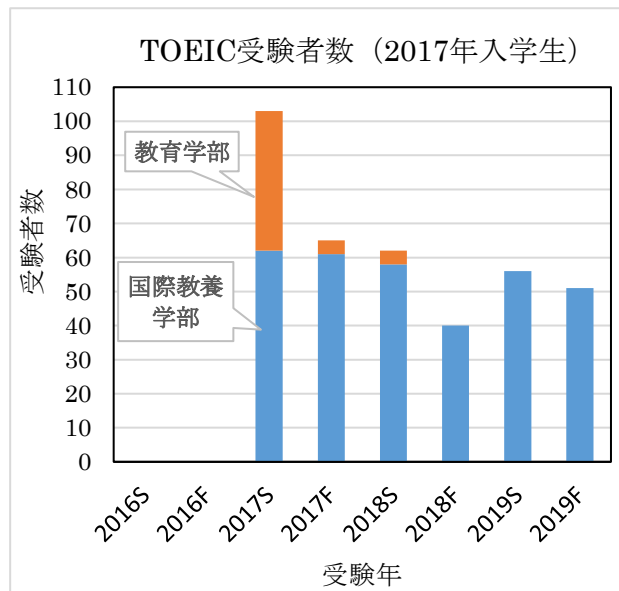
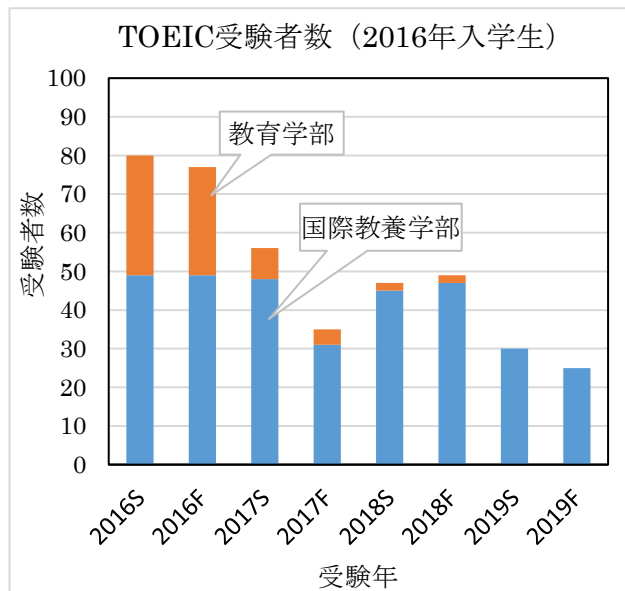
TOEIC 受験者数の推移を 2016 年から示します（下表参照）。国際教養学部学生には、年 2 回（春 S、秋 F）の TOEIC 受験を義務付けており、TOEIC 得点 500 点以上が三年生への進級の条件になっています。

入学年度＝ 受験日	TOEIC 受験者数												合 計
	2019		2018		2017		2016		2015		2014 以前		
	ILA	EDU	ILA	EDU	ILA	EDU	ILA	EDU	ILA	EDU	ILA	EDU	
2016 Spring							49	31	45	34	80	22	263
2016 Fall							49	28	36	24	86	23	244
2017 Spring					62	41	48	8	37	18	44	25	283
2017 Fall					61	4	31	4	42	3	46	26	217
2018 Spring			86	43	58	4	45	2	30	0			268
2018 Fall			83	0	40	0	47	2	37	0			209
2019 Spring	101	52	75	1	56	0	30	0					315
2019 Fall	26	3	25	0	29	0	25	0					227

ILA= 国際教養学部、EDU=教育学部

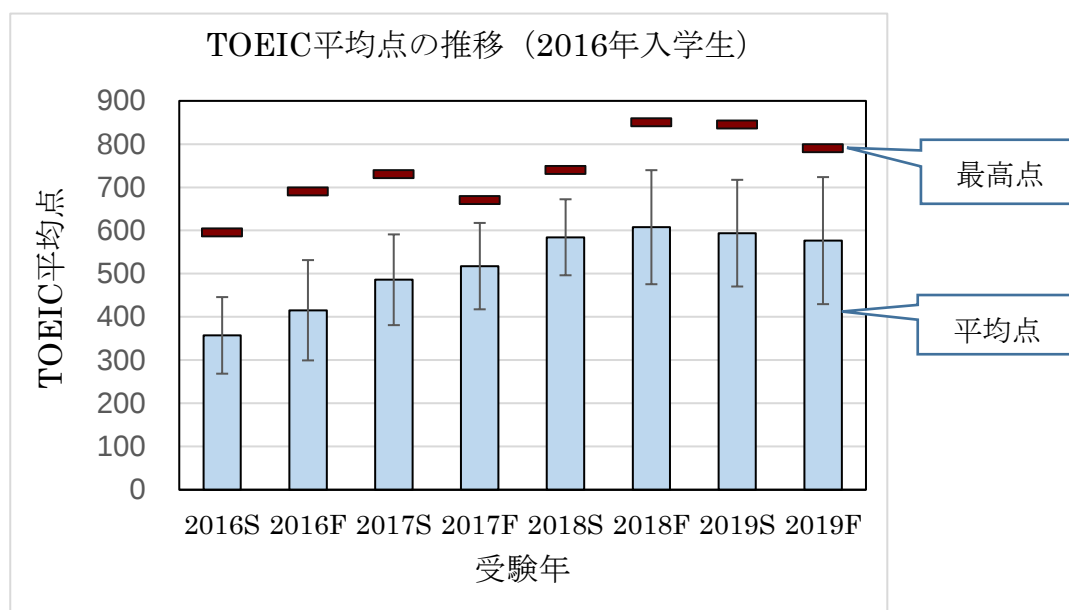


TOEIC 受験者数の推移を、2016 年入学生（4 年生）および 2017 年入学生（3 年生）の二学年について示します。国際教養学部学生の多くは、2 年生後期に留学するために、二年生秋の受験者がやや少なくなり、4 年生後期が卒業研究で多忙となるために受験者が減少するが、その他の学年では、ほとんどすべての学生が年二回受験している。



2 TOEIC 得点の推移

2016 年入学生（4 年生、全学部）の TOEIC 平均点および最高得点の推移を示します。2 年生春までの試験で、多くの国際教養学部の学生が三年生への進級条件である 500 点以上の成績を取得しているので、3 年生後期以降は、平均点の上昇が見られない。



国際教養学部の PDCA サイクル

本 AP 事業の発足時に不足していた「PDCA サイクル構築のために必要な事項」として下記の要件があった。それらのいくつかが AP 事業によって達成された。

- ・ ディプロマ・ポリシー (DP) の策定
- ・ DP を達成するための具体的手段として DP ルーブリックの策定
- ・ 授業科目毎に DP ルーブリックを割り付けたカリキュラム・マップの策定
- ・ 学生が自己評価するためのシステムの構築 (AP 事業)
- ・ 大学が DP 達成度を評価するシステム (AP 事業)

AP 事業によって構築された PDCA サイクルは下記のとおりである。

PLAN (計画)	教務委員会の策定した報告書に基づいて、教員がシラバスの作成・改訂を行う。
DO (実行)	教員は、授業を実施する。 学生は、授業を受講する。e ポートフォリオに、授業外学修時間・講義資料・DP ルーブリック達成度を記入する (AP 事業)。
CHECK (評価)	学生は、DP ルーブリック達成度を自己評価する (AP 事業)。 教員は、成績分布・合格率・DP ルーブリック達成度などについて自己評価する。 大学は、学生が自己評価した DP ルーブリック達成度および学生の成績によって、DP 達成度を評価する (AP 事業)。
ACTION (改善)	教務委員会は、教員の自己評価結果、学生の DP ルーブリック達成度を判断して、改善案を示した報告書を策定する。必要に応じて、ディプロマ・ポリシーおよび DP ルーブリックの改訂を教授会に上程する。さらに、IR センターは、資格試験 (TOEIC 等) および採用試験などのデータの解析を行う。

3.7 事業計画⑦

アクティブ・ラーニング（AL）に関するデータを分析した結果を教員間で共有するとともに、ALのベスト・プラクティスの一定のモデルについて議論し、理解を深め、その精度の向上を図る

アクティブ・ラーニング手法（国際教養学部、教育学部）

国際教養学部で用いているアクティブ・ラーニング（AL）手法（33 手法）の詳細について下記に示します。

Category 分類 1: Inward-Prepared 内向き-準備型(全 7 種類)

1. Creative Writing クリエイティブ・ライティング	Students write about their thoughts and emotions by creating a story, developing characters, and using other literary elements. 物語の作成、登場人物の発展、その他の文学的要素を用い、考えや感情を記述する。
2. Self-Assessment 自己評価	Students make a self-assessment about their own performances in relation to course standards and criteria created by teachers. 教員が作成した授業の評価基準に照らし、学生は自分のパフォーマンスを自己評価する。
3. Written Paraphrases and Summaries 言い換えや要約の記述	Students write the main points by paraphrasing and summarizing. 要点を自分の言葉で言い換えたり、まとめたりして記述する。
4. Feedback Survey/ Report フィードバック・アンケート/レポート	At the midway point or several times per semester, students provide feedback and an evaluation of the class, including which activities they enjoyed, what they activities they found effective and what kinds of projects they would like to take part in, or provide feedback on behavioral goals to improve the effectiveness of learning. 学期中に数回、又は中間期に、学生は授業についての評価やフィードバックを行う。楽しかったり、効果的だった授業内のアクティビティや取り組みたいアクティビティ、又は、学修効果を向上させるための行動目標に関するフィードバックを行う。
5. Journal Writing ジャーナル・ライティング（振り返りの記述）	Students write on various topics such as their own thoughts about class and homework, how to study, and their successes and failures etc. Journals typically require less research than term research papers, and teachers may choose to give feedback, edit, or evaluate. Typically, however, the instructor does not award grades and check grammar, as many times, the objective is the development of writing fluency. 学生は、授業や課題に対する自分の考え、勉強法、成功や失敗などの様々なトピックについて書く。ここで言うジャーナルとは、振り返りに重点をおいた記述で、文献のリサーチ等は余り必要としない。教員がフィードバック、編集、評価などをする場合もある。スラスラと書く練習なので、通常成績はつけず、文法もチェックしないことが多い。
6. Response/Reaction Writing リアクション・ライティング	Students read a passage or passages and write their own opinions. It is often the case that students write a summary and then write their own opinions. 学生は読んだ文章に対して自分の意見を書く。読んだ文章の要約を書いた後、自分の意見を書く場合が多い。
7. Senior Thesis 卒業論文	Students read relevant literature and conduct detailed research, formulate a thesis or hypotheses, formulate research questions, plan an outline, and go through the cycles of writing, editing, and revising under the guidance of a senior thesis advisor. 学生は文献を読み、詳しい調査を行い、命題、仮説及び研究課題を立て、論文のアウトラインを作成する。担当教員の指導の下、

	書いては編集・訂正するというサイクルを繰り返し、論文を完成させる。
--	-----------------------------------

Category 分類 2: Outward-Prepared 外向き準備型(全 6 種類)

1. Skits and Dramatic Productions スキットやドラマ制作	Students act out prescribed encounters with another or multiple students in front of the class, working with fixed language patterns and expressions if language acquisition is (part of) the goal. Time is typically given for rehearsal outside of class. In dramatic productions, students have ample time to rehearse and the productions can consist of a cast from one to about ten people. Students could also take a scene from a novel. 学生は、クラスメイトと共にクラス全員の前で、与えられたストーリーの台詞を言う。授業外の時間でリハーサルが必要な場合も多い。言語習得が目的の場合は、特定の言語パターンや表現を使う。ドラマ制作では、準備のための十分な時間が与えられ、学生は複数の場面を含む演劇の脚本を作る。演じる学生は 1~10 人位で、小説の一場面を演劇にすることもある。
2. Formal Debates and Panel Discussion デイバートやパネル討論	Students argue for or against an issue in a structured way and are given time to prepare (typically outside of class) and have set times for speaking and rebuttal. In panel discussions, a group of students deemed knowledgeable about a specific issue or topic gathers to discuss said topic in front of an audience. Students ask questions or react to the views and opinions of other panel members. 学生はあるテーマについて、予め決められた方法で、賛成か反対かに分かれ、議論を進める。大抵の場合、授業外の時間に準備をする時間が与えられ、発言する時間は予め設定されている。パネル・ディスカッションでは、学生がグループ毎に与えられたテーマについて調べ、クラス全体の前でディスカッションを行う。学生は他のパネルメンバーの見解に対して意見を述べたり、質問したりする。
3. Presentations and Reverse Presentations プレゼンテーションやリバース・プレゼンテーション	Students present content individually or as a group to the whole class or to smaller groups. The content of their presentation can be prepared as slides or sometimes posters, either individually or in cooperation with co-presenters of typically three to five people. In reverse presentations individuals or small groups prepare content as they would for regular presentations, but instead of presenting to the class, the audience poses questions to which the presenter responds. The presenter must also be able to solicit good questions from the audience. 学生は、小グループやクラス全体に対して、個人又はグループで発表をする。プレゼンテーションの内容は、個人又は 3~5 人のグループで準備し、スライドやポスターを作る場合もある。リバース・プレゼンテーションとは、通常の発表と同じように、個人や小グループで内容を準備するが、発表を聴く学生が質問し、それに発表者が答える形で進められる。発表者は、聴衆から質問を上手に引き出す必要もある。
4. Creative Recitations 創造的な朗読	Individually or in groups, students recite poetry or other creative writing without having memorized it word for word to the whole class or to smaller groups. 個人又はグループで小グループやクラス全体に向けて、丸暗記ではなく、自分の創作を交えながら詩や文章を朗読する。
5. Surveys and Interviews アンケートやインタビュー	Students prepare questions and do field work to collect data for a larger project. 学生は問いを立て、データを集めるためのアンケートを実施したり、フィールドワークを行ったりする。
6. Peer Teaching ピア・ティーチング	Assuming the traditional role of teacher, students work individually or in groups to conduct a lesson presented to the whole class or to small groups. Lessons can take the form of lectures, workshops or participatory activities. Instructors can run structured lessons using a PowerPoint presentation or other materials prepared in advance, or can employ a more free extemporaneous

	format. 個人又はグループが先生役となり、小グループやクラス全体に対して、授業を行う。講義型の一方通行な授業でも良いし、ワークショップや参加型のレッスンでも良い。教員が予め準備したパワーポイントを使うなど、ある程度構成される場合もあれば、自由に行う場合もある。
--	---

Category 分類 3: Inward-Extemporaneous 内向き-即興型(全 5 種類)

1. Written Peer Review of Written Work 作文についての筆記による相互評価	Students share their writing assignments - typically essays - and offer advice to each other. Students can use peer assignment sheets designed by teachers or students. The sheets are filled out and returned to the writers. 学生同士で、作文を見せ合い、互いにコメントし合う。教員や学生が作った作文の評価表を使っても良い。コメントは用紙に記入し、筆者に渡す。
2. Pause for Reflection 熟考する時間	Teachers allow time in class for students to think and reflect upon presented or read materials, or simply allow time to formulate an opinion. 授業中に学んだり、読んだりしたことに対して、学生が振り返り、感想や意見をまとめる時間を取る。
3. Active Listening アクティブ・リスニング	When presented with a lecture or recorded listening passage in class (or outside class) that is typically challenging to comprehend, students are instructed to listen for key words or for general meaning. Through repetition of the lectures or replay of listening passages (though repetition may not always occur), students gradually construct the fuller, more complete meaning. 理解が難解な講義やリスニングの文章について、キーワードや全体的な意味を拾うよう、学生に指示をする。学生は、何度も繰り返し聞くことで、徐々に全体的な意味を聞き取ることができるようになる。
4. Close Reading 読解	Students read and think deeply to go beyond surface comprehension of a text in order to interpret meaning (useful in poetry). 学生は文章を表面的に読むのではなく、文章の意味を深く考える。(詩を読む時などに活用される。)
5. Symbolized Paraphrases and Summaries 非言語での言い換えや要約	Students paraphrase or restate the main points of a passage or lecture using some form of symbolism, whether through pictures, graphs, charts, or any form of expression outside language. 学生は、言語以外の媒体(例えば、図、グラフ、チャート等)で、講義や文章の要点を言い換えたり、まとめたりする。

Category 分類 4: Outward-Extemporaneous 外向き-即興型(全 11 種類)

1. Interactive Lectures 対話式講義	Lecturing by instructors where students are frequently required to ask questions and to offer opinions and views on the material being delivered. 学生は頻繁に質問、意見、見解を述べるのが義務付けられている中で、教員が講義を行う。
2. Facilitated Discussions ファシリテートされたディスカッション	Student-lead discussions in which one student acts as the facilitator and the other students participate based on explicit instructions and guidance with regard to their assigned or chosen roles. 学生 1 人がファシリテーターとなり、他の学生は、割り当てられた役割を担当し、ファシリテーターの指示に従いディスカッションを行う。
3. Free Discussions 自由討論	Students are given open or allotted time in class to discuss a particular issue, passage, etc. They are not assigned roles so it is up to group members to decide what participants' roles should be, if any. 決められた時間内に、または時間制限なく、与えられたトピックに関するディスカッションを行う。役割は決められておらず、学生が自由に行う。

4. Case Studies 事例研究	Students investigate a case that is presented to them by the teacher and try to draw conclusions and interpretations that would illustrate preferred practices. 学生は、教員が提示した事例について深く調査し、最適と思われる解釈や結論を出す。
5. Role Plays and Impromptu Skits ロールプレイや即興スキット	Students play/act out roles in short dramatic presentations. They typically script out language they will use and rehearse the roles (often in class) prior to performing them in front of others. In impromptu skits, students are called upon in an impromptu fashion to act out a scene using appropriate language patterns and expressions. 学生は短い演劇での役割を演じる。通常は、授業の中で台本を書き、役を演じるリハーサルを行う。また、即興スキットでは、適切な言葉や表現を使って、与えられた場面を即興で演じる。
6. Jigsaw Activities ジグソー・アクティビティ	Students have different information and have to communicate to convey the information to each other in order to finish the task. Students could also be involved in discussions in one group and then migrate to different groups to report on their previous discourse. 学生は、お互いに異なる情報を持ち、課題を完成させる為に、お互いの持っている情報を伝え合う。別の方法として、学生はグループ・ディスカッションに参加し、その後、別のグループに移動し、前のディスカッションの内容を報告する。
7. Oral Paraphrases and Summaries 口頭での言い換えや要約	Students orally paraphrase or restate the main points of a passage in their own words. 学生は、ある文章を口頭で言い換えたり、自分の言葉で要点を述べる。
8. Informal Debates インフォーマルなディベート	Students argue for or against an issue in a less-structured format. They are usually not given time outside of class to prepare, do not have set speaking and rebuttal time limitations, and may often pick their own sides to defend. 学生は、余りルールのない中で、あるテーマに賛成か反対かの意見を自由に述べる。大抵の場合、事前に準備をすることはなく、時間の制限も緩やかである。学生は、どちら側の意見につくかは自分で決めることができる。
9. Group Work on Questions 質問に対するグループワーク	Students work on questions in a group wherein cooperation is encouraged 提示された質問に対して、グループで協力して答える。
10. Think-Pair-Share and Think-Group-Share ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア	Students share opinions/answers/solutions etc. with a partner or group and perhaps then share consolidated content with a larger group or the whole class. 学生は、与えられたトピックに対し、意見、答え、解決案などを考え、パートナーやグループで共有する。共有することで意見などを更にまとめ、更に大きなグループやクラス全体に発表する。
11. Oral Peer Review of Written Work 作文についての口頭での相互評価	Students discuss a given assignment or content with their partners or group members and give constructive feedback. 学生は、お互いの作文を評価する評価シートを記入した後、パートナーやグループに対し、評価結果の口頭説明をする。

Category 分類 5: ALTS In All Categories **すべてのカテゴリーに含まれる AL (4 項目)**

1. Cooperative Student Projects 学生が協力して行うプロジェクト	Students work together sometimes doing different tasks to complete a project which could be upon completion presented as a presentation, report, essay, scrapbook, website/webpage, or in some other format. 学生は、大きな課題を分担し、協力して作業する。課題完了後は、クラス全員の前で発表したり、または、レポート、エッセイ、ウェブサイト等として提出する。
2. Simulations and Experiments 実地研	Students apply knowledge they have learned to a real-life simulation, such as an internship for applying knowledge of economics. Simulation may also be used before a lecture or discussion as a method of teaching new information.

修やシミュレーション	As an intercultural simulation, for example, students can think about cultural norms and adaptation in a situation where half of the population of Japan is foreigners. 学生は、実際の状況で知識を応用する。例えば、経済学での知識をインターンシップ等で活用する。新しいことを教える手段として、講義の前にシミュレーションを行うこともできる。異文化体験のシミュレーションとして、例えば、日本の人口の半分以上が外国人という場面から、文化や適応について考える。
3. Community Based Projects 地域コミュニティに根ざしたプロジェクト	Projects in which students cooperate with members of the wider community either as a group or individually. Community volunteer projects are one example. 学生は、個人又は他の学生と協力して、地域社会の中で、ボランティアなどのプロジェクトを行う。
4. Student-Created Assessment Criteria 学生による評価基準の作成	Standards and criteria for assignment, performance, projects, etc. and even course evaluation, are created in whole or in part by students. 課題、パフォーマンス、プロジェクトなどの評価基準を学生自身が作成する。

教育学部で用いているアクティブ・ラーニング（AL）手法（10 手法）の詳細について下記に示します。

教育学部の AL 手法

1. 振り返り・個別の質疑応答	「学んだことを確認し、次へつなげる」ことや授業内容の確認を目的で授業中に口頭で質問・解答させること
2. 小テスト・レポート	前回の授業内容あるいは授業の最後に「学んだことを確認し、次へつなげる」ことを目的として小テストを課したり、また、学んだことをさらに定着させる目的でレポートを課すこと
3. 調査学習	学生が与えられた課題・テーマについて、授業内外の学習を通して自分で調査・学習させる方法
4. グループ・ディスカッション グループワーク グループレポート	学生を少人数にグループ分けし、与えられた課題の解決に向けて協同で取り組ませる方法。2 人組によるペアワークを含む
5. フィールドワーク	学内外のフィールドを調査・観察場所として、調査や観察を通して情報収集を行わせる方法（学外の施設等の見学を含む）
6. 対話・課題型授業	授業において、特定のテーマについて対話やディスカッションを通して理解を深める方法。教員採用試験において試験される特定のルールの下で議論を集約するディベート方式を含む
7. ロールプレイング	学生に特定のテーマや状況を与えて演じさせることを通して、それぞれの立場の人等の考え方を体験的に学ぶ方法。教員採用試験等において試験される
8. プレゼンテーション	学生がパワーポイント等を用いて、発表資料を作成し、他者の前で自ら発表を行わせる方法
9. 指導案作成、模擬授業	教科・教育法科目等において、自ら授業を実践する目的で、学習指導要領を参考に指導案を作成し、具体的な授業を実践させ、教育実践力を育成する方法
10. PBL (Problem Based Learning)	学生が自ら問題を発見し、その問題を解決するために様々な努力をする過程で、経験や知識を得ていくという学習方法

英語学習に効果的な AL 手法について

ベストプラクティス構築に向けて

英語の授業での学生によるアンケート（2019 年度）によって「英語スキルに対する AL の効果」について検討しました。

Table 1. Classes where English skills were assessed by students.

Students ^{a)}	1-2 School years				3-4 School years
	17 (15)	22 (20)	23 (6)	20 (20)	33 (32)
Class	English 3 (Speaking)	Reading 1 (Reading)	Academic Writing 1	English 1 (Speaking)	World Ethnography Japanese Society
Date	June 23	July 3 and 8	July 8	July 17	August 2

a) The values in parenthesis are number of effective sheets assessed by students.

方法

MIC は 5 分類された 33 の AL 手法を用いて授業を行っている。分類 5 に属する 4 つの AL 手法は、インターンシップなどの学外での授業で用いられる手法であるので、除外し、残りの 29 手法を対象とした（参照 付録 A）。さらに、共通性のある AL 手法は集約して 24 項目で調査を行った。最初に、授業担当教員が実際に授業で用いている AL 手法を 24 項目から選んだ。学生は、教員が選んだ AL 手法について英語スキル（読む、書く、聞く、話す、語句と文法）への効果を 4 段階で評価した。表 1 に示す科目を受講した全体で 115 名の学生が評価シート（付録 B）を用いて英語スキルを評価した。

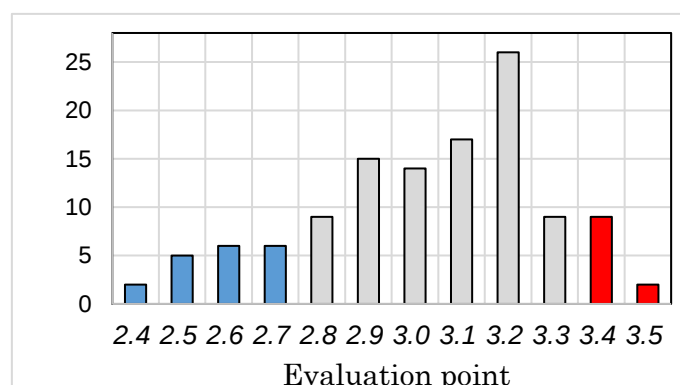


Figure 1. Distribution of the evaluation points: Average and standard deviation of 120 evaluation points were determined 3.01 and 0.26, respectively

結果

各評価の六つの科目の平均点を表 2 に示す。図 1 は全評価点の分布を示す。全科目、全英語スキルの 120 の評価点の平均値は 3.01、標準偏差 0.26 であった。上位から 15%に相当する偏差値 60 を示すポイント は 3.27 (= 3.01 + 0.26)であり、下位から 15%に相当する偏差値 40 を示すポイントは 2.75 (= 3.01 - 0.26)であった。そこで、3.27 ポイント以上を効果的な AL 手法、2.75 ポイント以下の AL 手法は効果的でないとした。

表 2. 評価結果のまとめ

No.	アクティブ・ラーニング手法	平均点				
		Read	Write	Listen	Speak	V & G
1	クリエイティブ・ライティング ジャーナル・ライティング リアクション・ライティング	3.10	3.28	2.96	2.90	3.18
2	自己評価	2.72	2.76	2.57	2.56	2.66
3	言い換えや要約の記述	3.16	3.45	2.42	2.45	3.19
4	フィードバック・アンケート/レポート	3.13	3.07	2.90	2.94	3.19
5	卒業論文やリサーチペーパー	3.39	3.39	2.61	2.71	3.35
6	スキットやドラマ制作	2.80	2.81	2.89	2.99	2.89
7	ディベートやパネル討論	2.97	2.63	3.16	3.16	2.97
8	プレゼンテーションやリバー・プレゼンテーション	2.85	2.76	2.94	3.19	2.95
9	創造的な朗読	2.45	2.42	2.70	2.88	2.62
10	アンケートやインタビュー	3.15	3.17	3.30	3.30	3.14
11	ピア・ティーチング	3.09	3.10	3.10	3.09	3.15
12	作文についての筆記による相互評価	3.33	3.42	2.45	2.45	3.39
13	熟考する時間	3.19	3.22	3.11	3.17	3.28
14	アクティブ・リスニング	3.06	3.01	3.37	3.23	3.31
15	読解	3.44	2.91	2.47	2.59	3.06
16	非言語での言い換えや要約	3.16	3.09	2.90	2.97	3.18
17	対話式講義	3.10	3.00	3.15	3.18	3.15
18	ファシリテートされたディスカッション 自由討論(ディスカッション)	2.80	2.85	3.04	3.16	2.90
19	事例研究	2.97	3.19	2.94	3.00	3.13
20	ロールプレイや即興スキット	2.76	2.79	3.02	3.10	2.86
21	ジグソー・アクティビティー	2.75	2.97	2.68	2.74	2.84
22	口頭での言い換えや要約	3.19	3.11	3.15	3.35	3.15
23	インフォーマルなディベート	2.98	2.92	3.31	3.39	3.05
24	質問に対するグループワーク ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア	3.18	3.25	3.34	3.46	3.20

赤色の網掛けの値は、評価点 3.27以上の値を示す。青色の網掛けの値は、評価点2.75以下の値を示す。

- 1) 表 2 (評価のまとめ) において、“読む”の点数分布が、“書く”の点数分布に似ていることが分かる。そこで、読む、書く、聞く、話す、語句と文法の 5 つの英語スキル間の関係について検討した。お互いの 10 の関係の相関係数を表 3 に示す。例として、“読む”と“聞く”の関係のプロットを示すが、相関係数は低い。一方、声で学ぶ“聞く”と“話す”の相関係数が高いことが分かる。同様に文字を通じて学習をする「読むと書く」の間の相関係数も高い。

そこで、“読む”の点数を AL 手法に対してプロットを行い、“書く”の点数を重ね書きした(図 2)。その結果、文字を通じて学習をする「読むと書く」は、同様の挙動を示した。「クリエイティブ・ライティング、ジャーナル・ライティング、リアクション・ライティング」「言い換えや要約の記述」「卒業論文やリサーチペーパー」「作文についての筆記による相互評価」「読解」が効果的な AL 手法であり、「自己評価」「ディベートやパネル討論」「創造的な朗読」は効果的でないことが分かった。

- 2) 次に、“聞く”の点数を AL 手法に対してプロットを行った(図 2)。そのプロットに、“話す”の点数を重ね書きした結果、声を通じて学習する「話すと聞く」の英語スキルは、同じ挙動を示すことがわかった。「アクティブ・リスニング」「口頭での言い換えや要約」「インフォーマル

なディベート」「質問に対するグループワーク、ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア」が効果的な AL 手法であり、「言い換えや要約の記述」「卒業論文やリサーチペーパー」「作文についての筆記による相互評価」「読解」「ジグソー・アクティビティー」は効果的でないことが分かった。語彙と文法(V と G)は、他の 4 つの英語スキル（書く、読む、聞く、話す）と同時に学習することが多いので、V と G の学習に効果的な AL 手法は、書くと読むの英語スキルの最適 AL 手法に似ている。「作文についての筆記による相互評価」「熟考する時間」「アクティブ・リスニング」が効果的な AL 手法であった（図 2）。

英語スキル	相関係数 (R^2)			
	書く	聞く	話す	語彙・文法
読む	0.576	0.002	0.019	0.762
書く		0.010	0.037	0.712
聞く			0.916	0.025
話す				0.003

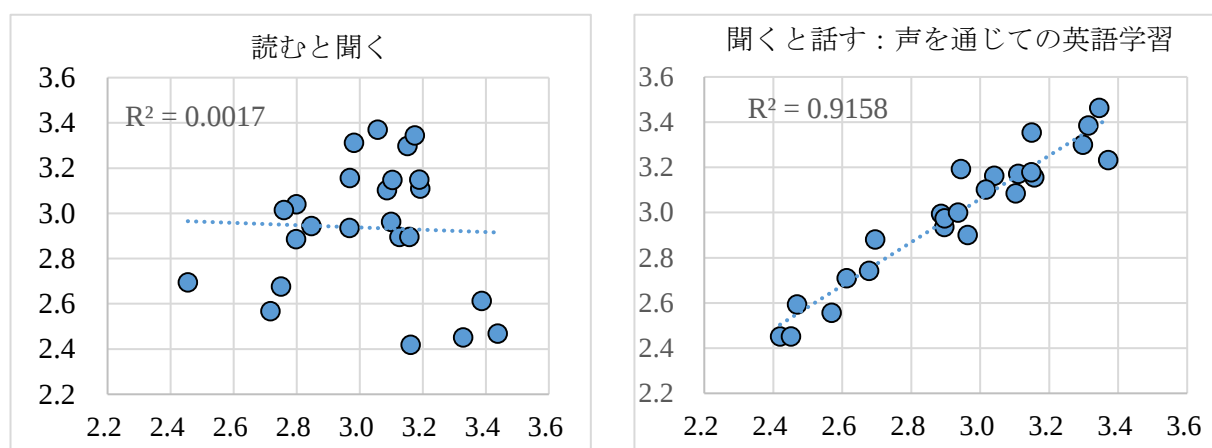
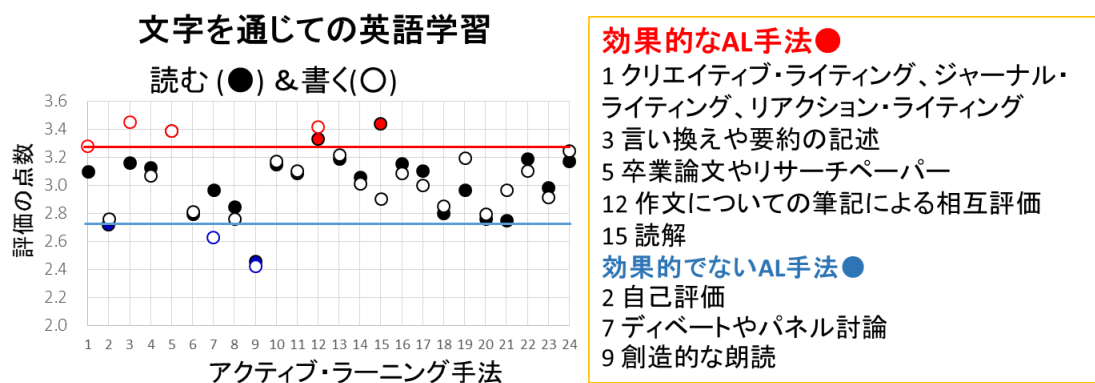


Figure 2. Relationships between the evaluation points of each English skill.

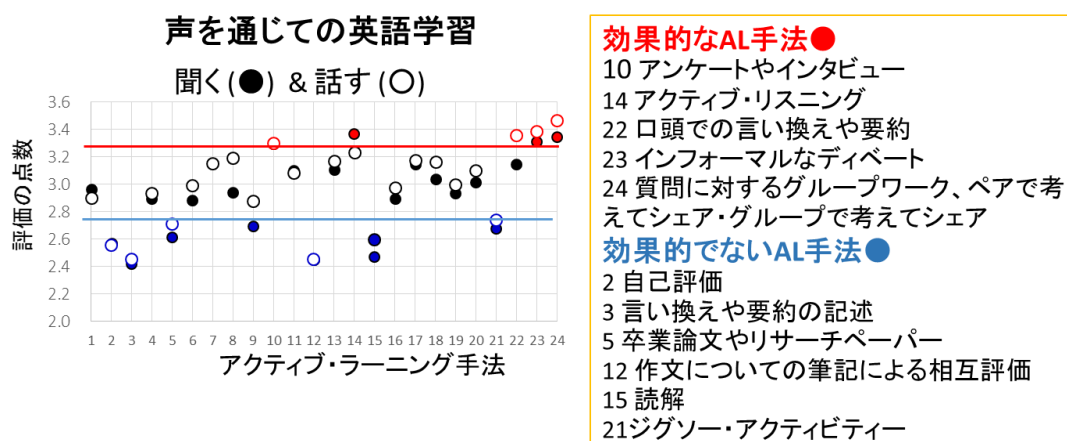
学生にとって学びやすい最適な AL 手段（ベストプラクティス）

上記の結果に基づけば、効果的な AL 手法を使った英語授業が、学生にとって学びやすい最適な AL 手段（ベストプラクティス）になると思われる。文字を通じて学ぶ「読む」と「書く」の授業は同じ AL 手法でベスト・プラクティスになり、声を通じて学ぶ「話す」と「聞く」のベスト・プラクティスは、同じ AL 手法で構築されると思われる。結論として、次のことが明らかになった。

- 1) 「読む」と「書く」のベストプラクティスとして、「クリエイティブ・ライティング、ジャーナル・ライティング、リアクション・ライティング」「言い換えや要約の記述」「卒業論文やリサーチペーパー」「作文についての筆記による相互評価」「読解」の AL 手法が推奨される。



- 2) 「話す」と「聞く」のベストプラクティスとしては、「アクティブ・リスニング」「口頭での言い換えや要約」「インフォーマルなディベート」「質問に対するグループワーク、ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア」の AL 手法が推奨される。



- 3) 語彙と文法 (V と G) は、他の 4 つの英語スキル (書く、読む、聞く、話す) と同時に学習することが多い。V と G のベストプラクティスは、「読む」と「書く」のベストプラクティスと似ている。

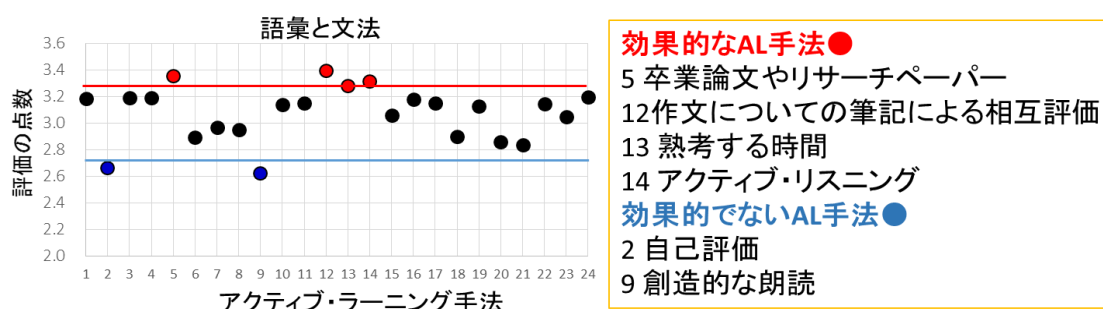


Figure 2. Plots of evaluation points on AL-methods

Appendix A: AL methods

	AL methods
Category 1	1. Creative writing
	2. Self-assessment
	3. Written paraphrases and summaries
	4. Feedback survey/Report
	5. Journal writing
	6. Response/Reaction writing
	7. <i>Senior thesis</i>
Category 2	1. Skits and dramatic productions
	2. Formal debates and panel discussions
	3. Presentation and reverse presentations
	4. Creative recitations
	5. Surveys and interviews
	6. Peer teaching
Category 3	1. Written peer review of written work
	2. Pause for reflection
	3. Active listening
	4. Close reading
	5. Symbolized paraphrases and summaries
Category 4	1. Interactive lectures
	2. Facilitated discussion
	3. Free discussions
	4. Case studies
	5. Role plays and impromptu skits
	6. Jigsaw activities
	7. Oral paraphrases and summaries
	8. Informal debates
	9. Group work on questions
	10. Think-pair-share and Think-group-share



	No.	AL methods
Category 1	1	1. Creative writing 5. Journal writing 6. Response/Reaction writing
	2	2. Self-assessment
	3	3. Written paraphrases and summaries
	4	4. Feedback survey/Report
	5	7. <i>Senior thesis</i>
Category 2	6	1. Skits and dramatic productions
	7	2. Formal debates and panel discussions
	8	3. Presentation and reverse presentations
	9	4. Creative recitations
	10	5. Surveys and interviews
	11	6. Peer teaching
Category 3	12	1. Written peer review of written work
	13	2. Pause for reflection
	14	3. Active listening
	15	4. Close reading
	16	5. Symbolized paraphrases and summaries
Category 4	17	1. Interactive lectures
	18	2. Facilitated discussion 3. Free discussions
	19	4. Case studies
	20	5. Role plays and impromptu skits
	21	6. Jigsaw activities
	22	7. Oral paraphrases and summaries
	23	8. Informal debates
	24	9. Group work on questions 10. Think-pair-share and Think-group-share

Category 5: ALTS In All Categories

- | | |
|---------------------------------|--|
| 1. Cooperative Student Projects | 2. Simulations and Experiments |
| 3. Community Based Projects | 4. Student-Created Assessment Criteria |

Appendix B: Example of assessment sheet

1～2 学年用 アクティブ・ラーニング（AL）の効果についてのアンケート（英語科目）

下記の☆印の付いた AL 項目について、英語スキルに対する効果を 4 段階で評価下さい。

評価 4= 大いに英語スキルに役立っている。 3= やや英語スキルに役立っている。
2= あまり英語スキルに役立っていない。 1= ほとんど英語スキルに役立っていない。

科目名 English 1-3 英語 1 (担当 Stephanie Lim)		英語スキル 注) V and G= Vocabulary and Grammar				
アクティブ・ラーニング (AL)		Reading	Writing	Listening	Speaking	V and G
分類 1	☆ 1. クリエイティブ・ライティング 5. ジャーナル・ライティング 6. リアクション・ライティング	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	2. 自己評価	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	3. 言い換えや要約の記述	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	☆ 4. フィードバック・アンケート/レポート	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	7. 卒業論文やリサーチペーパー	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
分類 2	☆ 1. スキャットやドラマ制作	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	2. ディベートやパネル討論	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	3. プレゼンテーションやリパース・プレゼンテーション	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	4. 創造的な朗読	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	☆ 5. アンケートやインタビュー	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
分類 3	6. ピア・ティーチング	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	1. 作文についての筆記による相互評価	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	☆ 2. 熟考する時間	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	3. アクティブ・リスニング	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	4. 読解	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
分類 4	5. 非言語での言い換えや要約	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	1. 対話式講義	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	2. ファシリテートされたディスカッション	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	3. 自由討論 (ディスカッション)	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	4. 事例研究	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	☆ 5. ロールプレイや即興スキット	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	6. ジグソー・アクティビティー	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	☆ 7. 口頭での言い換えや要約	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	☆ 8. インフォーマルなディベート	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	☆ 9. 質問に対するグループワーク	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4
	10. ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4	1, 2, 3, 4

自由記述欄

本アンケートは、文部科学省採択 大学教育再生加速プログラム (AP) に関連する調査です。

教員が用いる AL 手法の調査

教員が担当授業の中で、どのような AL 手法を使っているかの調査を 2017 年に行った。その内容については平成 29 年度報告書で報告しているので、転記する。

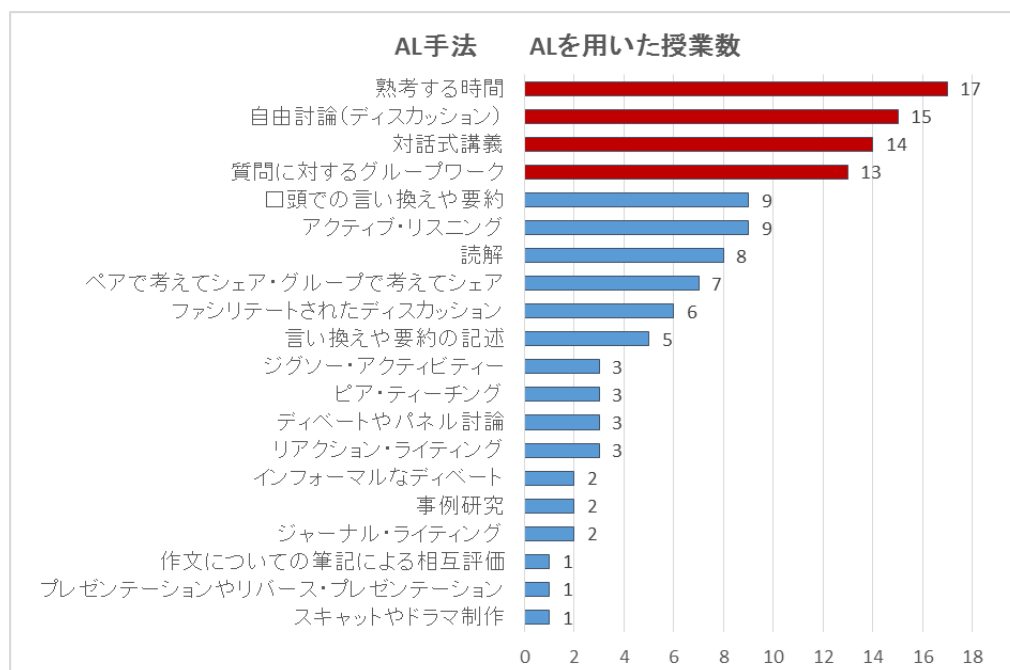
国際教養学部 27 名教員が、2017 年前期および後期に担当した授業から代表的な授業一つを選び、AL 手法を「ほぼ毎回」「2 回に 1 回」「8 回に数回」「学期中に 1 回程度」「まったく使わない」の頻度に分けて回答した。

「ほぼ毎回」と「2 回に 1 回」の高頻度で使った AL 手法を集計した。集計結果を右表に示す。

AL 手法 29 (カテゴリー 5 を除く) の内、20 手法が用いられていることが分かる。なかでも、「熟考する時間」「自由討論」「対話式講義」「質問に対するグループワーク」などの AL 手法が、半分近くの授業で用いられていることが分かった。

分類	AL 手法	授業数
3	熟考する時間	17
4	自由討論(ディスカッション)	15
4	対話式講義	14
4	質問に対するグループワーク	13
3	アクティブ・リスニング	9
4	口頭での言い換えや要約	9
3	読解	8
4	ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア	7
4	ファシリテートされたディスカッション	6
4	言い換えや要約の記述	5
1	リアクション・ライティング	3
2	ディベートやパネル討論	3
2	ピア・ティーチング	3
4	ジグソー・アクティビティ	3
1	ジャーナル・ライティング	2
4	事例研究	2
4	インフォーマルなディベート	2
2	スキットやドラマ制作	1
2	プレゼンテーションやリバーシ・プレゼンテーション	1
3	作文についての筆記による相互評価	1
合計		124

対象科目＝2017 年前期および後期。回答した教員数＝27 名。対象となった AL 数＝29 (カテゴリー V を除く)



「英語スキルに対するALの効果の学生アンケート(2019)」と「教員に対するアンケート(2017)」の結果を合わせて、次表にまとめた。

- 1) 教員が多用している「熟考する時間」「自由討論」「対話式講義」のAL手法は、学生にとっては有効だとは思っていないことが分かった。
- 2) 学生が有効であるとしている「インフォーマルなディベート」「アンケートやインタビュー」は、教員がほとんど使っていないことが分かる。
- 3) 教員が多用している「質問に対するグループワーク」「アクティブ・リスニング」「口頭での言い換えや要約」は、学生にとっても有効であることが分かった。

No.	アクティブ・ラーニング手法	教員の選んだAL数	平均点				
			Read	Write	Listen	Speak	V & G
1	クリエイティブ・ライティング						
	ジャーナル・ライティング	2	3.10	3.28	2.96	2.90	3.18
	リアクション・ライティング	3					
2	自己評価		2.72	2.76	2.57	2.56	2.66
3	言い換えや要約の記述	5	3.16	3.45	2.42	2.45	3.19
4	フィードバック・アンケート/レポート		3.13	3.07	2.90	2.94	3.19
5	卒業論文やリサーチペーパー		3.39	3.39	2.61	2.71	3.35
6	スキットやドラマ制作	1	2.80	2.81	2.89	2.99	2.89
7	ディベートやパネル討論	3	2.97	2.63	3.16	3.16	2.97
8	プレゼンテーションやリバーズ・プレゼンテーション	1	2.85	2.76	2.94	3.19	2.95
9	創造的な朗読		2.45	2.42	2.70	2.88	2.62
10	アンケートやインタビュー		3.15	3.17	3.30	3.30	3.14
11	ピア・ティーチング	3	3.09	3.10	3.10	3.09	3.15
12	作文についての筆記による相互評価	1	3.33	3.42	2.45	2.45	3.39
13	熟考する時間	17	3.19	3.22	3.11	3.17	3.28
14	アクティブ・リスニング	9	3.06	3.01	3.37	3.23	3.31
15	読解	8	3.44	2.91	2.47	2.59	3.06
16	非言語での言い換えや要約		3.16	3.09	2.90	2.97	3.18
17	対話式講義	14	3.10	3.00	3.15	3.18	3.15
18	ファシリテートされたディスカッション	6	2.80	2.85	3.04	3.16	2.90
	自由討論(ディスカッション)	15					
19	事例研究	2	2.97	3.19	2.94	3.00	3.13
20	ロールプレイや即興スキット		2.76	2.79	3.02	3.10	2.86
21	ジグソー・アクティビティー	3	2.75	2.97	2.68	2.74	2.84
22	口頭での言い換えや要約	9	3.19	3.11	3.15	3.35	3.15
23	インフォーマルなディベート	2	2.98	2.92	3.31	3.39	3.05
24	質問に対するグループワーク	13					
	ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア	7	3.18	3.25	3.34	3.46	3.20

1. ○印は、アンケートで教員が実際に使っていると答えたAL手法
2. 赤色の網掛けの値は、評価点3.27以上の値を示す。青色の網掛けの値は、評価点2.75以下の値を示す。

クリティカル・シンキングに効果的な AL 手法について

クリティカル・シンキング（CT）に対する AL 手法の効果を検証するために、学生へのアンケート調査を実施した。

調査	アクティブ・ラーニング（AL）についてのアンケート（クリティカル・シンキング）
実施日	1 回目 令和 2 年 1 月 10 日（金） 2 回目 令和 2 年 1 月 21 日（火）
対象学生	4 年生
回答数	50（有効回答数 46）
方法	アンケート用紙による回答、または Google アンケートを使ったインターネットによる回答

1) 作業手順

1. 本学の CT 手法は、①重要な情報の特定、②情報の正確性を見極め、③問題解決の方法と攻略法、④情報の分類化、⑤多面的思考、⑥情報の活用、⑦演繹的推論の要素からなっている。しかし、アンケートを実施するためには具体化が必要であったので、具体的内容の CT に修正を行った（令和元年 6 月から）。この間にクリティカル・シンキング・テストを担当しているジェームス・ファース先生に意見を求める（下記のアンケートのために具体的内容にした CT を参照）。
2. 本学の 33 の AL 手法から CT に適していると思われる 15 の AL 手法を選んでアンケートを作成した（下記アンケート用紙を参照）。
3. 宮崎国際大学テスト・研究・評価委員会（TRAC: Testing, Research and Assessment Committee、アン・ハワード委員長）へアンケート実施申請を提出（令和元年 11 月 26 日）。
4. TRAC からの回答（令和 2 年 1 月 8 日）
5. 授業終了後に教室に出向いて 4 年生学生にアンケート調査への協力依頼。アンケート調査は、Google アンケートまたは紙媒体を使って 4 年生学生を対象に実施。各 CT 要素に対する AL の効果を 4 段階で評価。その際に学生が「研修参加に関する同意書」に署名して、学生の同意を得る（令和 2 年 1 月 10 日、1 月 21 日）

2) クリティカル・シンキング（Critical thinking CT）要素

本学が提案している CT 要素	アンケートのために具体的内容にした CT 要素
1. 関連情報の見極め	CT 1-2 情報収集 必要な情報を見出し、情報の信頼性を見極める
2. 情報の信頼性の評価	
3. 手法と攻略法	CT 3-4 作業計画 結論に至る工程を確認し、グループの意見をまとめる
4. 分類的思考法	
5. 見通しを持った思考法	CT 5 再考 他グループと意見交換などを通じて異なる見方をする
6. 適用と評価	CT 6-7 結論 他グループの意見や新しい情報を取り入れて内容を評価・修正し、最適な結論を導き出す
7. 推論	

3) アンケート用紙

2020 年 1 月 10 日

国際教養学部 4 年生へ

アクティブ・ラーニング (AL) についてのアンケート (クリティカル・シンキング) のお願い

宮崎国際大学 AP 事務局

本学では、アクティブ・ラーニング (AL) によって、クリティカル・シンキング (CT) や英語スキルの能力の向上を目指しています。そこで、今回は CT に対する AL の効果について、アンケート調査をさせていただきます。各 CT 要素に対するアクティブ・ラーニングの効果を、4 段階で評価下さい。

評価	4=大いに役立っている、3=やや役立っている、 2=あまり役立っていない、1=ほとんど役立っていない
----	---

【CT 1-2】必要な情報を見出し、情報の信頼性を見極める (情報収集)

アクティブ・ラーニング手法	評価
1. アンケートやインタビュー (学生は問いを立て、データを集めるためのアンケートを実施したり、フィールドワークを行ったりする)	1, 2, 3, 4
2. ピア・ティーチング (個人又はグループが先生役となり、小グループやクラス全体に対して授業を行う。講義型の一方通行な授業でもワークショップや参加型のレッスンでも良い)	1, 2, 3, 4
3. ファシリテートされたディスカッション (学生 1 人がファシリテーターとなり、他の学生は割り当てられた役割を担当しファシリテーターの指示に従いディスカッションを行う) 自由討論 (与えられたトピックに関するディスカッションを行う。役割は決められておらず、学生が自由に行う)	1, 2, 3, 4
4. 事例研究 (学生は教員が提示した事例について深く調査し、最適と思われる解釈や結論を出す。)	1, 2, 3, 4
5. ジグソー・アクティビティ (学生は、お互いに異なる情報を持ち、課題を完成させる為に、お互いの持っている情報を伝え合う。別の方法として、学生はグループ・ディスカッションに参加し、その後、別のグループに移動し、前のディスカッションの内容を報告する)	1, 2, 3, 4

【CT 3-4】結論に至る工程を確認し、グループの意見をまとめる (作業計画)

1. ピア・ティーチング (個人又はグループが先生役となり、小グループやクラス全体に対して授業を行う。講義型の一方通行な授業でもワークショップや参加型のレッスンでも良い)	1, 2, 3, 4
2. ファシリテートされたディスカッション (学生 1 人がファシリテーターとなり、他の学生は、割り当てられた役割を担当し、ファシリテーターの指示に従いディスカッションを行う。) 自由討論 (与えられたトピックに関するディスカッションを行う。役割は決められておらず、学生が自由に行う)	1, 2, 3, 4
3. 事例研究 (学生は、教員が提示した事例について深く調査し、最適と思われる解釈や結論を出す。)	1, 2, 3, 4
4. ジグソー・アクティビティ (学生は、お互いに異なる情報を持ち、課題を完成させる為に、お互いの持っている情報を伝え合う。別の方法として、学生はグループ・ディス	1, 2, 3, 4

カッションに参加し、その後、別のグループに移動し、前のディスカッションの内容を報告する)	
5. 学生が協力して行うプロジェクト (学生は大きな課題を分担し協力して作業する。課題完了後はクラス全員の前で発表したり、レポート、エッセイ、ウェブサイト等として提出する。)	1, 2, 3, 4

【CT 5】 発表を通じて他グループと意見交換などをして、異なる見方をする (再考)

1. ディベートやパネル討論 (学生はあるテーマについて、予め決められた方法で、賛成か反対かに分かれ、ディベートを進める。パネルディスカッションでは、学生がグループ毎に与えられたテーマについて調べ、クラス全体の前でディスカッションを行う。学生は見解に対して意見や質問をする) インフォーマルなディベート (学生は、あるテーマに賛成か反対かの意見を自由に述べる。事前準備なく、時間の制限も緩やかである。学生は、どちら側の意見につくかは自分で決めることができる)	1, 2, 3, 4
2. プレゼンテーションやリバーシ・プレゼンテーション (学生は、小グループやクラス全体に対して、個人又はグループで発表をする。リバーシ・プレゼンテーションとは、通常の発表と同じように、個人や小グループで内容を準備するが、発表を聴く学生が質問し、それに発表者が答える形で進められる。)	1, 2, 3, 4
3. ピア・ティーチング (個人又はグループが先生役となり、小グループやクラス全体に対して授業を行う。講義型的一方通行な授業でもワークショップや参加型のレッスンでも良い)	1, 2, 3, 4
4. 熟考する時間 (授業中に学んだり、読んだりしたことに対して、学生が振り返り、感想や意見をまとめる時間を取る)	1, 2, 3, 4
5. ファシリテートされたディスカッション (学生 1 人がファシリテーターとなり、他の学生は、割り当てられた役割を担当し、ファシリテーターの指示に従いディスカッションを行う。) 自由討論 (与えられたトピックに関するディスカッションを行う。役割は決められておらず、学生が自由に行う)	1, 2, 3, 4
6. ジグソー・アクティビティ (学生は、お互いに異なる情報を持ち、課題を完成させる為に、お互いの持っている情報を伝え合う。別の方法として、学生はグループ・ディスカッションに参加し、その後、別のグループに移動し、前のディスカッションの内容を報告する)	1, 2, 3, 4
7. 質問に対するグループワーク (提示された質問に対してグループで協力して答える) ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア (学生は、与えられたトピックに対し、意見、答え、解決案などを考え、パートナーやグループで共有する。共有した意見を、更に大きなグループやクラス全体に発表する)	1, 2, 3, 4

【CT 6-7】 他グループの意見や新しい情報を取り入れて内容を評価・修正し、最適な結論を導き出す (結論)

1. 自己評価 (教員が作成した授業の評価基準に照らし、学生は自分のパフォーマンスを自己評価する)	1, 2, 3, 4
2. アンケートやインタビュー (学生は問いを立て、データを集めるためのアンケートを実施したり、フィールドワークを行ったりする)	1, 2, 3, 4
3. ディベートやパネル討論 (学生はあるテーマについて、予め決められた方法で、賛成か反対かに分かれ、ディベートを進める。パネルディスカッションでは、学生がグループ毎に与えられたテーマについて調べ、クラス全体の前でディスカッションを行う。学生は見解に対して意見や質問をする) インフォーマルなディベート (学生は、あるテーマに	1, 2, 3, 4

賛成か反対かの意見を自由に述べる。事前準備なく、時間の制限も緩やかである。学生は、どちら側の意見につくかは自分で決めることができる)	
4. ピア・ティーチング (個人又はグループが先生役となり、小グループやクラス全体に対して授業を行う。講義型的一方通行な授業でもワークショップや参加型のレッスンでも良い)	1, 2, 3, 4
5. 対話式講義 (学生は頻繁に質問、意見、見解を述べるのが義務付けられている中で、教員が講義を行う)	1, 2, 3, 4
6. ファシリテートされたディスカッション (学生 1 人がファシリテーターとなり、他の学生は、割り当てられた役割を担当し、ファシリテーターの指示に従いディスカッションを行う) 自由討論 (与えられたトピックに関するディスカッションを行う。役割は決められておらず、学生が自由に行う)	1, 2, 3, 4
7. ジグソー・アクティビティ (学生は、お互いに異なる情報を持ち、課題を完成させる為に、お互いの持っている情報を伝え合う。別の方法として、学生はグループ・ディスカッションに参加し、その後、別のグループに移動し、前のディスカッションの内容を報告する)	1, 2, 3, 4

4) 結果解析

アクティブ・ラーニング手法（AL）	CT 要素に対する評価の平均点			
	CT 1-2	CT 3-4	CT 5	CT 6-7
1. 自己評価				3.04
2. アンケートやインタビュー	2.98			3.02
3. ディベートやパネル討論			3.15	3.27
4. インフォーマルなディベート				
5. プレゼンテーションやリバーシ・プレゼンテーション			3.20	
6. ピア・ティーチング	3.09	3.07	3.18	3.11
7. 熟考する時間			3.20	
8. 対話式講義				3.22
9. ファシリテートされたディスカッション	3.26	3.17	3.20	3.36
10. 自由討論				
11. 事例研究	3.02	3.00		
12. ジグソー・アクティビティー	3.04	3.04	3.16	3.13
13. 質問に対するグループワーク			3.38	
14. ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア				
15. 学生が協力して行うプロジェクト		3.24		
平均値	3.15			
標準偏差	0.11			
注）太字の数字は偏差値 60 以上を示す（平均値＋標準偏差=3.26）。イタリックの数字は偏差値 40 以下を示す（平均値－標準偏差=3.04）。				

解析

- ・ 評価平均値が、ほとんどで 15 の AL 手法で「3=やや役立っている」以上の評価になり、学生が CT に役立たないと考えている AL 手法がないことが分かった。
- ・ 24 項目の各アンケート項目の評価の平均点が 2.98 から 3.38 の 0.40 ポイントの差の中にあり、大きな差異が見られなかった。
- ・ その中で、偏差値が 60 を超えている AL である「ファシリテートされたディスカッションや自由討論」「ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア」などが、学生にとって学びやすい最適な AL 手段（ベストプラクティス）とした。“討論”や“グループ・ワーク”を学生が有効と考えていることが分かった。

CT 要素の内容		偏差値が 60 (3.26) を超えている AL
CT 1-2	必要な情報を見出し、情報の信頼性の見極める（情報収集）	9. ファシリテートされたディスカッション 10. 自由討論
CT 3-4	結論に至る工程を確認し、グループの意見をまとめる（作業計画）	
CT 5	他グループと意見交換などを通じて、異なる見方をする（再考）	13. 質問に対するグループワーク 14. ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア
CT 6-7	他グループの意見や新しい情報を取り入れて内容を評価・修正し、最適な結論を導き出す（結論）	3. ディベートやパネル討論 4. インフォーマルなディベート 9. ファシリテートされたディスカッション 10. 自由討論

3.8 事業計画⑧⑩

教員が授業で使用しているアクティブ・ラーニングの手法で、クリティカル・シンキング及び英語力に焦点を当てたアクティブ・ラーニングの指導事例を教員から収集する。
収集したクリティカル・シンキング及び英語力に焦点を当てたアクティブ・ラーニングの指導事例をまとめた事例集を作成する。

アクティブ・ラーニング事例集の作成

令和元年度は、対象を国際教養学部から教育学部および地域貢献まで広げ、8つのAL事例を収集した。平成30年度は国際教養学部の事例に留まっていたが、事例を拡大することができた。作成した事例集（日本語版、英語版）は教員に配布した。また、日本語版は全国のAP採択校に配布した。



学部等	No	教員名	【科目名】 アクティビティ タイトル
国際教養学部	1	笠井 綾 Alan Simpson	【人間関係の諸問題1】恋愛のカギを探せ！
	2	笠井 綾 Alan Simpson	【人間関係の諸問題2】被抑圧者の演劇のエクササイズによるバイスタンダー効果のレッスン
	3	Anderson Passos	【数理思考概論】ブール論理
	4	Anderson Passos	【情報通信技術概論】アンケート調査と分析
教育学部	5	渡邊 耕二	【算数科教育法Ⅱ】算数の模擬授業
	6	坂倉 真衣	【理科教育法Ⅰ】児童に「どうして？」「何で？」と聴かれたら？ —小学校理科指導内容の背景にある科学的な知識・考え方を理解する—
	7	日高まり子	【こどもの音楽活動】ヴォーカルアンサンブルを楽しもう～「もみじ」を歌おう～
産業連携	8	Alan Simpson, Lloyd Walker, Cathrine-Mette Mork	【宮崎国際大学の産業連携】アクティブ・ラーニングを使った地方銀行における英語教育



数理思考概論における AL (国際教養学部)



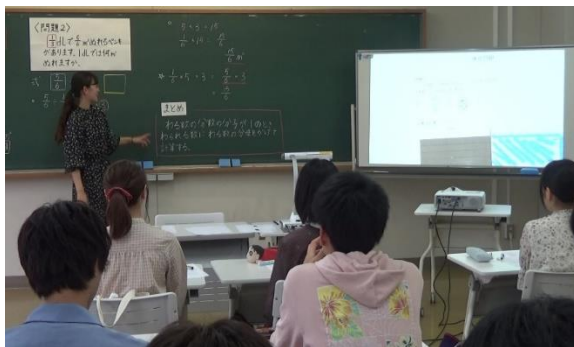
人間関係の諸問題における AL (国際教養学部)



こどもの音楽活動における AL (教育学部)



理科教育法 I における AL (教育学部)



算数科教育法における AL (教育学部)



アクティブ・ラーニングを使った地方銀行における英語教育 (産業連携)

英語教育セミナー

小中高大におけるアクティブ・ラーニングの事例発表

グローバル化の中で国際共通語である英語力の向上が重要な課題になっています。新学習指導要領では小学校の英語教科化、中学校・高等学校での英語コミュニケーション能力の育成、および教育方法としてのアクティブ・ラーニングによる主体的、対話的な深い学びが重視されています。本学は2014年に文部科学省大学教育再生加速プログラムに採択され、アクティブ・ラーニング教授法について5年間研究してまいりました。初等教育での英語教育および英語コミュニケーション能力の育成には、アクティブ・ラーニングが最適な教育手法だと言われています。そこで、文部科学省教科調査官 富高雅代氏をお招きして、英語教育セミナーを開催し、小学校、中学校、高等学校において英語教育に従事している先生方に広くアクティブ・ラーニング手法を紹介しました。

事業名	英語教育セミナー「小中高大におけるアクティブ・ラーニングの事例発表」																												
後 援	宮崎県教育委員会、宮崎県市町村教育委員会連合会、宮崎市教育委員会 宮崎県県立学校校長協会、宮崎県校長会、宮崎県私立中学高等学校協会 NHK 宮崎放送局、MRT 宮崎放送、UMK テレビ宮崎、宮崎日日新聞社																												
日 時	2019年11月29日（金）13:15～17:00（受付12:45から）																												
会 場	KITEN 大会議室（宮崎駅西口 KITEN ビル8階）〒880-0811 宮崎市錦町1番10号																												
参加者	<table border="1"> <tr> <td>参加者人数</td><td>学外</td><td>講師</td><td>学内</td><td>学生</td><td>合計</td></tr> <tr> <td></td><td>87</td><td>4</td><td>14</td><td>7</td><td>112</td></tr> </table> <table border="1"> <tr> <td>学外参加者（内訳）</td><td>小学校</td><td>中学校</td><td>高等学校</td><td>教育委員会</td><td>その他</td></tr> <tr> <td>参加者数（機関数）</td><td>14名 (14校)</td><td>28名 (20校)</td><td>35名 (22校)</td><td>4名 (3機関)</td><td>6名 (6機関)</td></tr> </table> 小学校＝延岡市立東小学校、延岡市立東海小学校、日向市立財光寺南小学校、日向市立財光寺小学校、日向市立坪谷小学校、椎葉村立椎葉小学校、宮崎市立赤江小学校、宮崎市立木花台小学校、都城市立西小学校、三股町立三股小学校、日南市立吾田小学校、日南市立桜ヶ丘小学校、日南市立南郷小学校、串間市立本城小学校 中学校＝延岡市立南浦中学校、日向市立大王谷中学校、椎葉村立椎葉中学校、西都市立銀鏡中学校、西都市立三財中学校、宮崎市立久峰中学校、宮崎市立東大宮中学校、宮崎市立宮崎中学校、宮崎市立赤江東中学校、宮崎市立清武中学校、都城市立山之口中学校、都城市立五十市中学校、都城市立妻ヶ丘中学校、都城市立祝吉中学校、小林市立野尻中学校、小林市立紙屋中学校、えびの市立飯野中学校、日南市立油津中学校、日南市立吾田中学校 高等学校＝高千穂高等学校、延岡高等学校、延岡星雲高等学校、富島高等学校、日向高等学校、本庄高等学校、宮崎商業高等学校、宮崎東高等学校、宮崎南高等学校、宮崎海洋高等学校、高城高等学校、都城商業高等学校、飯野高等学校、日南振徳高					参加者人数	学外	講師	学内	学生	合計		87	4	14	7	112	学外参加者（内訳）	小学校	中学校	高等学校	教育委員会	その他	参加者数（機関数）	14名 (14校)	28名 (20校)	35名 (22校)	4名 (3機関)	6名 (6機関)
参加者人数	学外	講師	学内	学生	合計																								
	87	4	14	7	112																								
学外参加者（内訳）	小学校	中学校	高等学校	教育委員会	その他																								
参加者数（機関数）	14名 (14校)	28名 (20校)	35名 (22校)	4名 (3機関)	6名 (6機関)																								

	等学校、福島高等学校、宮崎日本大学高等学校、日章学園高等学校、宮崎第一高等学校、宮崎学園高等学校、小林西高等学校、日南学園高等学校、クラーク記念国際高校連携校宮崎キャンパス 教育委員会＝西都市教育委員会、日南市教育委員会、宮崎県教育委員会高校教育課 その他＝スクールIE 南宮崎校、宮崎県青年海外協力隊を支援する会、開隆堂出版、光村図書出版、啓林館九州支社、宮崎日日新聞社
登壇者の紹介	  富高雅代教科調査官（文部科学省） 岩切宏樹指導教諭（宮崎市立赤江小学校）   遠目塚由美指導教諭（宮崎市立赤江東中学校） 森田浩平教諭（県立宮崎大宮高等学校）  カタリーナ・モーク准教授（宮崎国際大学）
講演概要	基調講演として富高雅代調査官（文部科学省）から新学習指導要に記載されている「英語教育における主体的・対話的で深い学び」について解説がなされた。主体的に学ぶ事例として、日南振徳高校の生徒が外国人観光客との英会話に挑戦する動画の紹介もあった。次に小学校・中学校・高等学校でのアクティブ・ラーニングの事

	例の報告があった。岩切宏樹指導教諭（宮崎市立赤江小学校）からは、小学校で「主体的・対話的で深い学び」のために Small Talk を事例にして、定型型の英会話に「Why」を加えることで、主体的な学びを引き出せることが紹介され、聴衆者間でグループワークを行った。遠目塚由美指導教諭（宮崎市立赤江東中学校）からは、中学校の各学年の主体的・能動的な授業例として、タスク活動、四技能統合型の授業、即興のディベートやペアでのやり取りなどが動画を使って紹介された。森田浩平教諭（県立宮崎大宮高等学校）は、「千切り大根・冷汁」などの宮崎らしい情報を、知っている語彙で説明する練習の説明があった。また、英作文の相互添削、ポスターを使ったプレゼンテーションなどのアクティブ・ラーニングの事例の紹介もあった。最後に、大学での模擬講義を本学のカタリーナ・モーク准教授が行った。種々の授業手法について受動的授業（Passive）と能動的授業（Active）の分類を参加者がグループワークで行った。二つの授業の違いの説明がモーク先生からあり、両方が授業では必要であることの説明がなされた。
アンケート集計結果	講師の先生方と宮崎国際大学教職員を除くセミナー参加者 94 名のうち 70 名からアンケートの回答が得られた（回収率 74%）。全体な内容については、「とても興味深かった（64%）」「ある程度興味深かった（30%）」と高い評価が得られた。

英語教育セミナープログラム

1	12:45-	受付
2	13:15-13:20	司会進行 宮崎国際大学国際教養学部 ウォーカー・ロイド学部長補佐 学長挨拶 宮崎国際大学 山下恵子 学長
3	13:20-14:15	基調講演 「これからの英語教育～新学習指導要領を踏まえて」 文部科学省初等中等教育局教育課程課 富高雅代 教科調査官 座長 宮崎国際大学国際教養学部 樋口晶彦 特任教授
4	14:15-14:30	休憩
5	14:30-16:00	小学校・中学校・高等学校の事例発表 座長 宮崎国際大学教育学部 村端佳子 准教授
1)	14:30-15:00	事例発表 1 「小学校でのアクティブ・ラーニングの事例」 宮崎市立赤江小学校 岩切宏樹 指導教諭
2)	15:00-15:30	事例発表 2 「中学校でのアクティブ・ラーニングの事例」 宮崎市立赤江東中学校 遠目塚由美 指導教諭
3)	15:30-16:00	事例発表 3 「高等学校でのアクティブ・ラーニングの事例」 県立宮崎大宮高等学校 森田浩平 教諭
6	16:00-16:50	宮崎国際大学模擬講義「Active Learning through Active Learning」 宮崎国際大学国際教養学部カタリーナ・モーク准教授（第二言語としての英語教育）
7	16:50-17:00	閉会挨拶 宮崎国際大学国際教養学部 アンデルセン・パッソス学部長
8	17:00-17:40	情報交流会

令和元年度 宮崎国際大学

英語教育 セミナー

小中高大におけるアクティブ・ラーニングの事例発表

グローバル化の中で、国際共通語である英語力の向上が重要な課題になっています。そのような状況下で、新学習指導要領では小学校の英語教科化、中学校・高等学校での英語コミュニケーション能力の育成、および教育方法としてのアクティブ・ラーニングによる主体的、対話的な深い学びが重視されています。今回、宮崎国際大学は文部科学省教科調査官 富高雅代氏をお招きして、英語教育セミナーを開催することとなりました。本セミナーでは小学校、中学校、高等学校において英語教育に従事している先生方に、広くアクティブ・ラーニング手法を紹介したいと考えています。皆様のご来場をお待ちしています。

日時
令和元年

11/29 [金]

13:15~17:00 (受付12:30~)

場所 **KITEN 大会議室** (宮崎駅西口 KITENビル 8階)
〒880-0811 宮崎市錦町1番10号 TEL 0985-78-5810

駐車場 宮崎駅西口駐車場をご利用いただき駐車券を持参してください。当方で精算いたします。

参加者 高等学校、中学校、小学校の教員、大学関係者、
本学教員及び学生

参加費 **無料** 定員 **100名**

申込み方法 裏面参加申込書によりお申込みください。

【主催】 宮崎国際大学

【後援】 宮崎県教育委員会 宮崎県市町村教育委員会連合会 宮崎市教育委員会
宮崎県県立学校長協会 宮崎県校長会 宮崎県私立中学高等学校協会
NHK宮崎放送局 宮崎放送 テレビ宮崎 宮崎日日新聞社

プログラム

司会進行 宮崎国際大学国際教養学部
ウォーカー・ロイド 学部長補佐

- 12:30 【受付】
- 13:15 【学長挨拶】
宮崎国際大学 山下 恵子 学長
- 13:20 【基調講演】
「これからの英語教育～
新学習指導要領を踏まえて」
文部科学省初等中等教育局教育課程課
富高 雅代 教科調査官
座長 宮崎国際大学国際教養学部
樋口 晶彦 特任教授
- 14:20 【宮崎国際大学 模擬講義～】
「Active Learning through Active Learning」
宮崎国際大学国際教養学部
カタリーナ・モーク 准教授
(第二言語としての英語教育)
- 15:05 【休憩】
- 15:20 【小学校・中学校・高等学校の事例発表】
座長 宮崎国際大学教育学部 村端 佳子 准教授
- 15:20 1) 事例発表 1
「小学校でのアクティブ・ラーニングの事例」
宮崎市立赤江小学校 岩切 宏樹 指導教諭
- 15:50 2) 事例発表 2
「中学校でのアクティブ・ラーニングの事例」
宮崎市立赤江東中学校 遠目塚 由美 指導教諭
- 16:20 3) 事例発表 3
「高等学校でのアクティブ・ラーニングの事例」
県立宮崎大宮高等学校 森田 浩平 教諭
- 16:50 【閉会挨拶】
- 17:00 【情報交流会】
(ご参加は自由です。軽食と飲み物をご用意しています。
お時間のある方は遠慮なくご参加ください。)

宮崎国際大学

〒889-1605 宮崎県宮崎市清武町加納丙1405番地
E-mail admissions@sky.miyazaki-mic.ac.jp URL http://www.mic.ac.jp/

問合せ
宮崎国際大学
英語教育セミナー
実行委員会

TEL.0985-85-5931
FAX.0985-84-3396

最新情報
配信中心

SNS してます！



3.9 事業計画⑨

これまでの取組の成果を教員に報告する FD 研修会を実施する。これまでの取組全体の教育効果や AP 事業終了後の取組の継続などに関して、教員と議論し意見をもらう。

FD 研修会(第 5 回 AP-FD、7 月 26 日)

【FD 研修会 (第 5 回)】

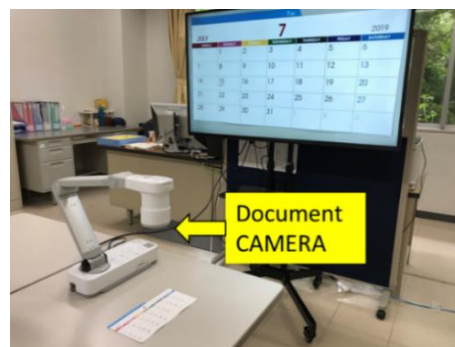
日時：令和元年 7 月 26 日 (金) 14 時 40 分～16 時 10 分 場所：2-102

参加者：13 名

講師：宮崎国際大学国際教養学部 安富淳先生

題目：書画カメラを使ったアクティブ・ラーニング

「書画カメラを使ったアクティブ・ラーニング」の FD 研修会を実施しました。日頃の授業に書画カメラを活用している安富淳先生が、授業で使った事例の紹介、書画カメラのメリット、取扱い方法について発表しました。この書画カメラは、AL を行い易くするために AP 事業で購入したもので、学生が紙に書いた内容(文書、図、絵など)を、即座に、大きいスクリーンや大型モニターに映し出し、学生と情報共有することができます。参加者との意見交換が活発になされた。今後の AL の授業に有効活用して頂きたいと思います。



最後に、AP アセスメント・オフィサーの保田から、「AP 事業の現況」と「AL の英語スキルに対する効果」について報告があった。「AL の英語スキルに対する効果」については、どの AL 手法がどの英語スキルに効果的であるかを、英語の授業で学生にアンケートを実施し、分析・検討した結果を参加者と共有し、今後の AP の取組へのさらなる協力を依頼しました。



第 4 回 FD 研修会（9 月 17 日）

【第 4 回 FD 研修会】（宮崎国際大学・宮崎学園短期大学合同 FD/SD 研修会と共催）

日時：令和元年 9 月 17 日（火） 15 時半～16 時 20 分

場所：宮崎学園短期大学会議室

参加者：14 名

講師：宮崎国際大学 AP アセスメント・オフィサー 保田昌秀

題目：数理・データサイエンスを教えるための基礎知識

【概要】

第 5 期科学技術基本計画（平成 28 年 1 月）では、ネットワークの飛躍的發展や ICT を最大限に生かした新しい価値やサービスを提供する「超スマート社会」が未来社会の姿として示されている。このような社会の実現のためには、数理・データサイエンスに関する基礎的知識・分析能力を身に付けた人材育成が重要となるとの説明があった後、本演題に関連して具体的な事例として本学で実施している大学教育再生加速プログラム（AP 事業）におけるアクティブ・ラーニングの教育成果を参考に説明された。

国際教養学部を中心に実践されているアクティブ・ラーニングは大別して 24 項目にわたるが、これらの教育法とその教育効果について、英語スキル（読む、書く、聞く、話す、語彙と文法）との関係において興味ある結果を見出している。すなわち、学生による 4 段階の自己評価アンケートで評価した結果、音声で学ぶ英語スキル「聞く、話す」に対するアクティブ・ラーニングの教育効果はその手法によりかなり異なり、①「アクティブ・リスニング、口頭での言い換えや要約、インフォーマルなディベート、質問に対するグループワークなど」が効果的と感じており、一方②「言い換えや要約の記述、卒論やリサーチペーパー、作文についての筆記による相互評価、読解、ジグソー・アクティビティ」は相対的に効果的でないと感じていることが紹介された。これらの結果は、学生にとって国際教養学部における英語教育について、アクティブ・ラーニングの手法によって講義内容が分かりやすく、理解しやすいと感じていることを示しており、英語教育の後に実施されるリベラルアーツ教育を実践する際に、①のアクティブ・ラーニングの手法をベストプラクティスとして選択し、教育実践することが有効である可能性を示している。

その他、入学者選抜と学生の成績動向との関係について、数理・データサイエンスの観点から解析した結果などが紹介された。

以上のように、今後大学教育の中で、数理・データサイエンスに関する基礎知識を身につけ、これらを有効に活用できれば、新しい観点から種々の曖昧な事例が明確に可視化できることを示している。

BEVI 研修会(第 6 回 AP-FD、1 月 10 日)

日時：令和 2 年 1 月 10 日（金） 14 時 40 分～17 時 15 分 場所：1-201

参加者：18 名（教員 12 名、職員 6 名）

講師：西谷 元（広島大学副理事 社会科学部教授）

題目：Evaluating the Impact of International Education: Implications and Applications from the Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI) （国際教育の影響の評価：信念、イベント、および価値のインベントリ (BEVI) からの含意と応用）

西谷元教授（広島大学大学院社会科学部 政策法務講座教授）を招待して、全国の 15 機関以上で留学の評価等に用いられている BEVI（Beliefs Events and Values Inventory）についての研修会を開催した。第一部では職員向けに BEVI のマネージメントについて、第二部では教員向けに BEVI の効果についての講演を行って頂いた。BEVI は背景質問（20 問）と心理特性質問（165 問）からなり、20~30 分で実施できる。性別や所属などの背景質問は解析時の分類分けに利用される。心理特性質問を通じて得られた情報はコンピュータで解析され、報告書の形で解析結果が示される。留学の評価のみならず、各種の評価にも使えることが示された。

Evaluating the Impact of International Education

Implications and Applications from the Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI)

Hajime Nishitani, LL.M., M.Jur
Professor, Hiroshima University
Vice Executive, Top Global University Project
hajime@law.hiroshima-u.ac.jp

2020. 1.10
Miyazaki International College



FD 研修会(第 7 回 AP-FD、1 月 14 日)

日時：令和 2 年 1 月 14 日（火） 16 時 20 分～17 時 15 分 場所：1-201

参加者：16 名

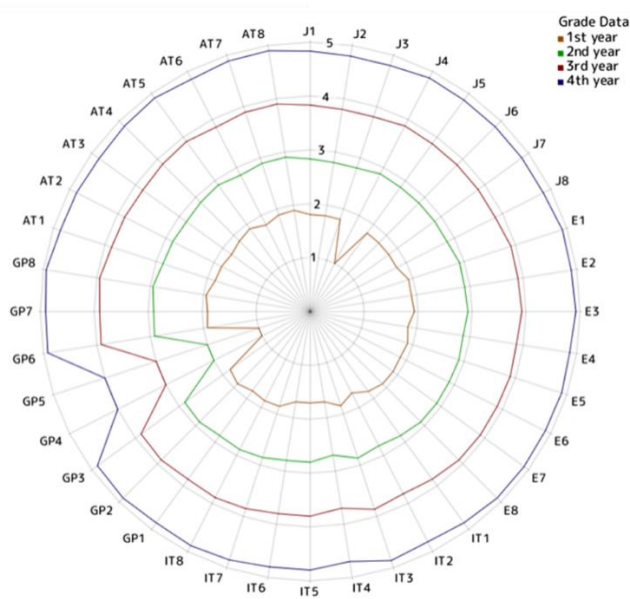
講師：宮崎国際大学国際教養学部 アンデルソン・パッソス学部長

題目：ICT を活用した教育内容の改善 Educational Improvement using ICT

宮崎国際大学は、令和元年度に大学教育再生加速プログラム（AP）の一環として、ディプロマ・ポリシー（DP）の達成度を学生の自己評価と学生の成績の両面から測れるシステムを構築しました。具体的には、今まで e ポートフォリオに活用していました Mahara®に、学生の成績を DP ルーブリックに割り付けができるプラグイン機能を付与しました。このシステムの概要と効果について、システム構築に尽力したパッソス学部長が講演を行いました。研修会では、最初に国際教養学部の DP および DP ルーブリックができた歴史および AP プログラムとの関連についての話があった。本学の e-ポートフォリオでは今まで Moodle による学生が課題の提出と Mahara による宿題とプロジェクトの紹介を行っていた。令和元年度の AP プロジェクトでは、学修成果を可視化するために、Mahara 上で学生の自己評価の結果と学生の成績が DP 毎にレーダーチャートに表示できることが示された。



All Items of DP Rubric



← Mahara での DP 実績の可視化

3.10 事業計画⑪

AP 事業の成果全体を発表する報告会を他の AP 校と合同開催し、本学の AP 事業の総体的成果を学外に発表する。

AP 事業北九州合同セミナー（六大学合同開催）

AP 事業北九州合同セミナーを崇城大学、北九州市立大学、山口大学、宮崎国際大学、日本赤十字九州国際看護大学、および鹿屋体育大学の六大学で合同開催しました。

事業名	AP 事業北九州合同セミナー
日 時	令和元年 11 月 11 日（月）13:30～17:50（受付 13 時から）
会 場	西日本総合展示場新館 AIM 3F 311 会議室 〒802-0001 北九州市小倉北区浅野三丁目 8-1 TEL093-541-5931
参加者	21 名（12 機関）
事業概要	文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）に採択の九州・山口地区の六大学が合同で標記セミナーを開催した。セミナーでは、過去六年間に渡って各大学が取り組んできたアクティブ・ラーニングによる教授法、学修成果の可視化、卒業の質保証などについての講演・質疑応答・グループ討議などが行われた。
講演概要	松下 琢氏（崇城大学）は、学生が自立学習できる施設としての英語教育施設（SILC）と自律学修センター（SALC）の取組を紹介され、その効果の検証結果および FD 研修会についても述べられた。木下祥一氏（北九州市立大学）は、学修成果を自己管理するポートフォリオ・システムの概要を紹介された。また、学生による地域への波及効果の調査結果についての報告があった。林 透氏（山口大学）は、カリキュラム・マップによるディプロマ・ポリシー（DP）達成度評価するシステム（YU CoB CuS）について国際総合科学部を例に説明がなされ、それぞれの DP について科目ごとの重み付けがあることが紹介された。保田昌秀氏（宮崎国際大学）は、英語スキルに対するアクティブ・ラーニングの効果を測定した結果を紹介した。後半はアラン・シン普森氏から学生の自己評価と学生の成績で DP ルーブリックを可視化する方法についての説明があった。中村光江氏（日本赤十字九州国際看護大学）からは、看護学にとって重要な“人間力”を含めた DP へのルーブリック評価等による内部質保証についての説明があった。また、卒業生アンケートによる卒業後のフォローアップやアクティブ・ラーニング手法についての学内 FD 研修会などについて話された。近藤亮介氏（鹿屋体育大学）は、PROG テストによってリテラシーとコンピテンシーの評価を行った結果を発表した。DP の一つであるスポーツ指導力を可視化するテストの実施についても話された。 後半のダイアログ・セッションでは、4～5 名のグループに分かれ、講演の振り返りを行い、特に興味を持った内容について講師へ質問を行った。DP に対する教員の認知度および DP に規定されたコンピテンシーが妥当かどうか。妥当でないとすれば、いつ改正するのが良いかなどが講師への質問があった。



趣旨説明



崇城大学 松下 琢 先生



北九州市立大学 木下祥一 先生



山口大学 林 透 先生



宮崎国際大学 アラン・シンプソン 先生



日本赤十字九州国際看護大学 中村光江 先生



鹿屋体育大学 近藤亮介 先生



ダイアログ・セッション

AP 事業北九州合同セミナープログラム

1. 開会の辞 宮崎国際大学 保田昌秀
2. 趣旨説明 山口大学 林 透
3. **発表・意見交換Ⅰ テーマⅠ・テーマⅡ・テーマⅢ・Ⅳの採択校 (13:45~15:25)**
 - 1) 崇城大学における AP 事業の取組と教育改革について 崇城大学 松下 琢 (13:45~14:10)
 - 2) 北九州市立大学における AP 事業の取組 北九州市立大学 木下祥一 (14:10~14:35)
 - 3) 山口大学における学位プログラム単位の質保証～YU CoB CuS による学修成果可視化の可能性
山口大学 林 透 (14:35~15:00)
 - 4) アクティブ・ラーニングの英語スキルに対する効果の測定
宮崎国際大学 保田昌秀 (15:00~15:25)
- 休憩(15:25~15:25)
4. **発表・意見交換Ⅱ テーマⅤの採択校 (15:35~16:25)**
 - 5) 「学士課程教育」と「看護現場での現任教育」のシームレスな接続を目指して
日本赤十字九州国際看護大学 中村光江(15:35~16:00)
 - 6) スポーツ指導者に求められるコンピテンシーの可視化・評価
鹿屋体育大学 近藤亮介 (16:00~16:25)
5. **ダイアログ・セッション (16:25~17:25)**

フロアの希望・要望を聴きながら、主に以下の話題でテーマトーク

 - 1) DP (ディプロマ・ポリシー) の認知度、DP に規定されたコンピテンシーの妥当性
 - 2) 学位プログラム単位の質保証のための参照基準や指標
 - 3) 認証評価や専門分野別外部評価から受ける影響や効果
 - 4) 専門分野別の学修成果に関するチューニングや社会・産業界との対話の場
 - 5) 学生にとって成長を実感できるものとは何か?
6. 閉会の辞 崇城大学 松下 琢

共同開催



学校法人 日本赤十字看護大学
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing



国立大学法人 鹿屋体育大学
NIFS NATIONAL INSTITUTE OF FITNESS AND SPORTS SCIENCE



宮崎国際大学
Miyazaki International University

AP事業北九州合同セミナー

学位プログラム単位の質保証について考える ～専門分野別の学修成果に着目して～

日時 令和元年11月11日(月)
13:30～17:30 (受付13時から)

場所 AIM(えいむ) 3F会議室(311)
(西日本総合展示場新館東隣)

文部科学省大学教育再生加速プログラム (AP)は、本年度で最終年度となりました。今後の大学教育で重要となるアクティブ・ラーニングによる教授法、学修成果の可視化、卒業の質保証などについて検討を深めてまいりました。

今回の合同セミナーでは、多様な専門分野での教学マネジメント改革を進めるAP採択校が一同に会し、2020年以降のポストAP時代に重要とされる「学位プログラム単位の質保証」「専門分野別の学修成果」に焦点を当てながら、それぞれの取組紹介、フロアとの意見交換を行いたいと考えています。皆様のご参加をお待ちしています。

登壇者

- (テーマⅠ) 松下 琢 氏 (崇城大学 理事・副学長・教務部長 教授)
- (テーマⅡ) 木下祥一 氏 (北九州市立大学 大学教育再生加速プログラム推進室 特任教員)
- (テーマⅠ・Ⅱ) 林 透 氏 (山口大学 大学教育機構大学教育センター准教授)
- 保田昌秀 氏 (宮崎国際大学 APアセスメント・オフィサー)
- (テーマⅤ) 中村光江 氏 (日本赤十字九州国際看護大学 看護学部長 教授)
- 近藤亮介 氏 (鹿屋体育大学 教育企画・評価室 特任助教)



お問合せ先

宮崎国際大学AP事務局
TEL 0985-85-5931
E-mail: myasuda@sky.miyazaki-mic.ac.jp

参加費
無料

プログラム

- 受付 (13:00～)
- 開会の辞 (13:30～13:35)
- 趣旨説明 (13:35～13:45)
- 発表&意見交換Ⅰ (13:45～15:25)
- 休憩 (15:25～15:35)
- 発表&意見交換Ⅱ (15:35～16:25)
- ダイアログセッション (16:25～17:25)
- 閉会の辞 (17:25～17:30)

AP 最終年度全体報告会（武蔵野大学有明キャンパス、東京）

AP 幹事校である京都光華女子大学短期大学部のお世話で「AP 全体報告会（下記、ポスター参照）」が予定されていましたが、新型コロナウイルスのために、開催が中止された。当校から発表予定だった要旨はオンラインで情報発信されることになった。

開催概要

大学教育再生加速プログラム(AP)は令和元年度で最終年度を迎えます。本報告会では、最終年度の総まとめとしてすべてのテーマが集結し、成果報告を行います。教員だけではなく、APの「主役」である学生が報告・議論する姿をご覧ください。APを通じた学生の成長を実感いただけることと思います。本報告会が参加者の皆さんにとって、今後の大学教育改革に向けた課題について考え、議論を深める場となれば幸いです。

プログラム

1日目

3月5日(木)

10:00-10:40	オープニング
11:00-13:00	ポスターセッション
12:30-13:30	学生交流企画*
13:40-14:25	口頭報告①/企業WS①*
	明石工業高等専門学校(テーマI) 東京理科大学(テーマI・II) 追手門学院大学(テーマIII) 山形大学(テーマV)
14:35-15:20	口頭報告②/企業WS②
	横浜国立大学(テーマII) 産業能率大学(テーマI・II) 小樽商科大学(テーマIV) 松本大学松商短期大学部(テーマV)
15:30-16:15	口頭報告③/企業WS③
	崇城大学(テーマI) 宇都宮大学(テーマI・II) 武蔵野大学(テーマIV) 山梨学院短期大学(テーマV)
16:25-17:10	口頭報告④/企業WS④
	宮崎国際大学(テーマI・II) お茶の水女子大学(テーマIII) 日本福祉大学(テーマV)
17:30-18:40	学生パネルディスカッション*
19:00-20:20	情報交換会

2日目

3月6日(金)

9:00-9:45	口頭報告⑤
	福岡工業大学(テーマI) 京都光華女子大学短期大学部(テーマI・II) 東京工科大学(テーマIV) 徳山工業高等専門学校(テーマV)
10:00-14:30	しゃべり場* (12:00-13:00は休憩)
15:00-16:00	エンディング

*企画の詳細はホームページをご覧ください。
企業WSの参加企業は決定次第、ホームページで案内します。

アクセス



武蔵野大学 有明キャンパス

〒135-8181 東京都江東区有明三丁目3番3号

- りんかい線「国際展示場」駅より徒歩7分
- ゆりかもめ「東京ビッグサイト」駅より徒歩6分

お問い合わせ

AP全体報告会事務局 TEL 03-5649-6903 (平日 10:00~18:00) E-mail info@ap-forum.jp
京都光華女子大学短期大学部 AP事務局 TEL 075-325-5408 E-mail apkoka@mail.koka.ac.jp

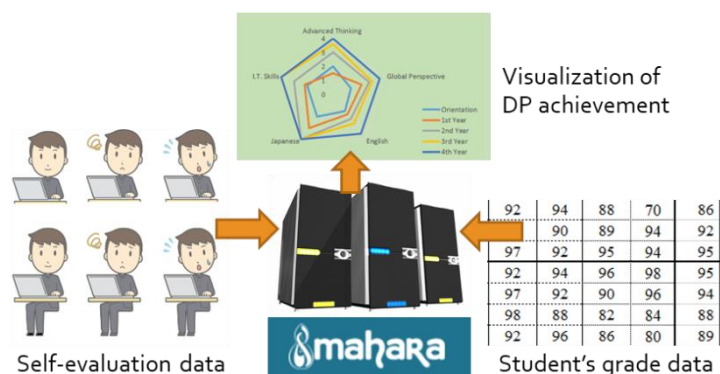
ディプロマポリシー（DP）達成進捗度の測定

ー学生の DP 自己評価システムの構築ー

宮崎国際大学 国際教養学部 学部長 アンデルソン・パッソス

1 はじめに

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針：DP）の達成の進捗度を把握することは、学修成果の可視化において重要である。そこで、本講演会では、DP 評価システムの構築について報告する。



2 ディプロマ・ポリシー(DP)の達成度評価

本学国際教養学部は、高度な思考力（DP1）、国際的な視野（DP2）、英語力（DP3）、日本語表現力（DP4）情報通信技術（DP5）の5つのDPを掲げ、DPの達成度を測定するために40の評価項目（DP ルーブリック）を策定している。本学の DP

評価は、1) 学生が定期的（年 1 回）にインターネットを通じて 40 項目の DP ルーブリックを自己評価する。2) 各 DP ルーブリックに割り付けられた授業科目（カリキュラム・マップ）の成績を 40 項目の DP ルーブリック毎に集計して、成績の達成度を客観評価する。3) さらに、学生は評価結果を見て、DP の達成の進捗度を把握することで行っている。図 1 には DP3 英語力について学生の自己評価と成績を表したレーダーチャートを示す。レーダーチャートでは、各学年の評点が重ならないようにするために、各学年の評点に 0～3 点の加点をして、学生の自己評価は線で、成績は面で表した。このシステムによって、PDCA の Check にあたる自己評価・客観評価を構築することができた。

AP 事業によって、シラバス（Plan）→授業（Do）→自己評価・客観評価（Check）→授業内容は手法の改訂・シラバスへの反映（Action）の PDCA 教育改善システムを完成することができた。

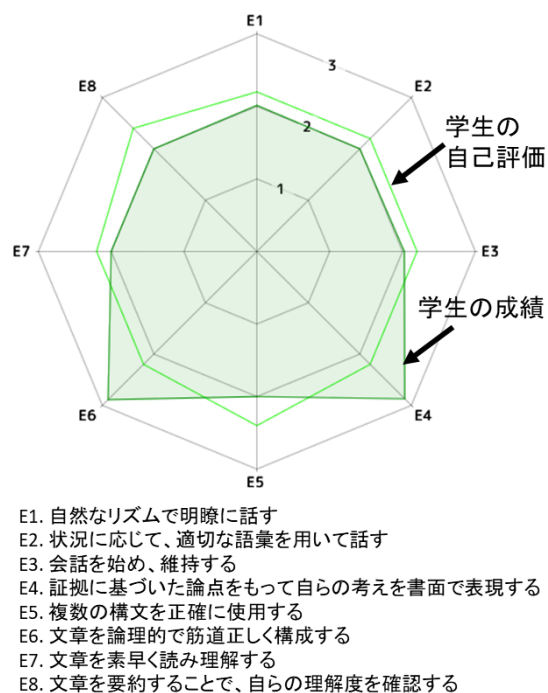


図 1. 学生の自己評価と成績で DP ルーブリックを評価した結果：2 年生の英語力（DP3）の例

3.10 事業計画⑫

本学の AP 事業の取組の成果をまとめた最終報告書を作成し、関係諸機関へ送付する

令和元年度（最終年度）報告書 大学教育再生加速プログラム（AP）〔テーマⅠ・Ⅱ複合型〕に AP 事業の取組成果をまとめて 78 機関に郵送した。



大学教育再生加速プログラム

平成26年度文部科学省採択
大学教育再生加速プログラム

令和元年度報告書 (最終年度)

大学教育再生加速プログラム(AP)
〔テーマⅠ・Ⅱ複合型〕



4. AP 事業（平成 26 年度～令和元年度）の成果概要

平成 26 年度（2014）

① 事業開始に必要な学内体制を整えるための学内ワークショップの開催

平成 26 年 8 月 20 日に大学教育再生加速プログラム（テーマⅠ・Ⅱ複合型）に採択された。早速、IR 推進委員会とその下位組織であるワーキンググループ及び事務組織等、本事業推進に係る各部署が事業推進体制について協議し、それぞれの役割を明確にした。また、本補助事業を適切に企画・運営していくために全教職員の本事業に対する共通理解を図るため、第 1 回合同ワークショップを平成 26 年 9 月 11 日に行った。平成 26 年 11 月 21 日に 5 つのワーキンググループ（WG）＝AL ベスト・プラクティス WG、クリティカル・シンキング WG、英語スキル WG、ルーブリック・ベース・シラバス WG、e ポートフォリオ WG による合同ワークショップを実施した。その後、各ワーキンググループによる個別の FD が実施された。そして、AP 事業に必要な事務補助員（平成 26 年 12 月採用）とアセスメント・オフィサー（平成 27 年 3 月採用）を配置した。

② 事業内容の概要と実施計画を学外に周知するための広報及びキックオフシンポジウムの開催

本事業内容に対する地域社会や他大学への理解を促すためのキックオフシンポジウムを平成 26 年 10 月 18 日に開催し、5 つのワーキンググループのリーダーが各ワーキンググループの概要についてプレゼンテーションを行った。さらに、教育改革事業を行っている他大学をはじめ、関係諸機関に本事業内容の詳細を記載したパンフレット及びポスター各 500 部を配布した。

③ クリティカル・シンキングのアセスメントテスト開発先進校（海外大学）の視察と会員登録

クリティカル・シンキング・アセスメントテスト（CAT）開発の先進校である米国テネシー工科大学のワークショップに平成 26 年 10 月 30～31 日に担当管理職員 1 名を派遣した。その際、担当者は全米科学財団（NSF）の協力の下、CAT を開発したテネシー工科大学の担当者と情報交換を行った。また、CAT を実施するためのトレーニングを受け、日本で CAT を実施する資格を得た。CAT を実施するために必要な会員登録は、その後平成 26 年 12 月 8 日に行った。さらに、CAT に関する情報収集と CAT 実施・採点資格取得のため、CAT を先駆的に行っている米国テネシー工科大学主催のワークショップ（平成 27 年 3 月 5～6 日）に教員 2 名を派遣し、クリティカル・シンキング・アセスメントに関するさらなる情報収集及び意見交換を行った。また、平成 27 年 3 月 23 日と 25 日に本学国際教養学部 4 年生 15 名に対し CAT を試験的に実施した。

④ アクティブ・ラーニングについての取り組み

- ・ **アクティブ・ラーニング体系化のための評価指標の策定**：本学において実践されているアクティブ・ラーニングの手法について多くの教員から聞き取り調査を行い、その結果をまとめ、包括的評価指標の検討を行った。また、様々なアクティブ・ラーニングの特徴を把握するなかで、どのようなアクティブ・ラーニングが効果的かという点について教員間で議論した。

評価指標の設定に関しては、定性的方法論に基づいて行うことが最も適切な方法であるとの結論に至った。それに基づく学内共通のアクティブ・ラーニングの評価指標の策定については、暫定的な評価指標が作成された。

- ・ **アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティス明確化のための教員相互授業参観とワークショップの開催**:平成 26 年 11 月 21 日の合同ワークショップにおいて、少人数制アクティブ・ラーニングによる英語でのリベラル・アーツ教育について、また、日本出身の学生に対して英語によるリベラル・アーツ教育を行う意義等について、海外出身の教員と日本出身の教員双方の視点から議論した。平成 26 年 12 月 11 日に、アクティブ・ラーニングのワーキンググループにおいて、心理学・政治学・歴史学の授業におけるアクティブ・ラーニングの様々な手法やその相違点について議論がなされた。平成 26 年 12 月 11 日に教育学部対象のワークショップにおいて「我が国における ICT 教育の現状と課題」をテーマとして、小学校における ICT を利用した教育実践報告、国際教養学部での授業におけるタブレットの利用、デジタル教科書及び e ポートフォリオの今後の活用等について議論した。また、アクティブ・ラーニングを用いた授業に対する学生による授業評価アンケートを行った。

⑤ e ポートフォリオへの取り組み

- ・ **e ポートフォリオの設置計画とシステム開発**: e ポートフォリオサーバー一式及び無線 LAN システム一式を購入し、平成 27 年 1 月初旬にそのシステム構築が完了した。また、平成 26 年 12 月に購入したタブレット PC60 台については、平成 27 年 1 月に国際教養学部 3 名の教員が試験的に授業で活用し、その教育効果について報告がなされた。さらには、同年 3 月 21 日にオープンキャンパスで 2 名の教員がタブレットを活用し報告書を提出した。なお、ソフトウェア Mahara を活用した e ポートフォリオ・システムの構築及び導入については、その詳細を検討の上、同年 3 月 Mahara のルーブリックのプラグイン作成等の詳細を決定した。
- ・ **e ポートフォリオに関する学内ワークショップの開催**:平成 27 年 2 月 9 日に行われた学内ワークショップにおいて、e ポートフォリオの目的や使用方法の概略について教職員に周知を図り、平成 27 年度からの e ポートフォリオの本格的な運用に備えた。

⑥ 平成 26 年度の事業内容に関わる年次報告と平成 27 年度の事業内容についての準備

平成 26 年度の事業の進捗状況と成果を主とした年次報告を、平成 27 年 3 月 30 日に IR 推進委員会で行った。また、同様の内容と次年度の事業計画等については、実績報告書提出前の 4 月 7 日に、教職員に対してのワークショップでその周知を図った。

平成 27 年度 (2015)

① e ポートフォリオ・センターの設置とタブレットの貸与

e ポートフォリオ・センターを設置し、アセスメント・オフィサー（平成 27 年 3 月採用）と事務補佐員（平成 26 年 12 月採用）を配置した。e ポートフォリオ（Mahara）に関しては e ポートフォリオ・ワーキンググループと協働しながら管理運営を行った。また、アセスメント・オフィサーと事務補佐員は、e ポートフォリオ関連業務だけでなく、本学におけるタブレット PC の貸与とその管理を担当した。7 月に平成 27 年度入学生に貸与した。7 月 21 日・23 日・24 日に貸与にあ

たってオリエンテーションを開催し、学生が効果的にタブレットを使用できるよう、アセスメント・オフィサーと事務補佐員が指導にあたった。納品が遅れたために、貸与の時期は当初の想定時期より大幅に遅れた。

② eポートフォリオ・ワークショップの開催

4月23日に教職員向けのeポートフォリオ・ワークショップを開催し、eポートフォリオに関する教職員の理解と知識を深めた。また、5月28日・29日にはeポートフォリオの国際学会であるiMoot#15をeポートフォリオ・センターで本学教職員がオンラインで視聴し、eポートフォリオに対する理解をいっそう深めた。また、9月28日、11月5日、平成28年1月28日にも教職員向けワークショップを開催した。

③ クリティカル・シンキングについての取り組み

- ・ **CATの日本語版の作成**：CATの著作権を持つ米国テネシー工科大学と交渉したところ、CATの日本語版8を作成することはテネシー工科大学の方針で難しいことがわかった。したがって、テネシー工科大学が作成するCATとは異なる、本学独自のCAT（MICCAT）の作成を直ちに行うこととした。
- ・ **CATテストの実施**：当初の予定より遅れたが、7月31日にCATテストを本学学生に実施した。テストは本学教員によって採点され、採点した答案はCATテストを開発・管理している米国テネシー工科大学に送付された。その後、テネシー工科大学よりその分析レポートが届いた。
- ・ **CATの会員登録の更新**：クリティカル・シンキングワーキンググループ（CTWG）により、CATの会員登録が更新された。
- ・ **CAT開発に関わる研修会への参加と実施調査**：8月3日から7日まで、グレゴリー・ダン教授を米国カリフォルニア州サンディエゴで開催された、テネシー工科大学主催のCATのトレーニングに派遣した。同トレーニングにおいてCATに関する情報を収集し、帰国後、得られた知識の学内での共有化に努めた。
- ・ **CATの活用ワークショップの開催**：「2015 アクティブ・ラーニングシンポジウム」の中の「アクティブ・ラーニングワークショップ」で、CTWGがCATの活用ワークショップを開催した。

④ アクティブ・ラーニングへの取り組み

- ・ **アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する教員研修の実施**：5月28日にアクティブ・ラーニング・ワーキンググループ（ALWG）が主催するアクティブ・ラーニングに関するFDを実施した。このFDでは、国際教養学部の4人の教員が、それぞれが効果的と考える自身のアクティブ・ラーニングの授業法を発表し、活発な議論がなされた。
- ・ **アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する第1回のシンポジウムの開催**：11月28日に「2015 アクティブ・ラーニングシンポジウム」を、学内外から多数の参加者を得て開催した。内容としては、「アクティブ・ラーニングの可視化：将来への展望」（担当：アン・ハワード准教授、カタリーナ・モーク講師）と「アクティブ・ラーニングによるクリティカル・シンキング能力の開発」（担当：グレゴリー・ダン教授、ベンジャミン・ピーター

ズ教授)の二つの研究発表が本学教員4名により行われ、会場からは熱心な質疑応答があった。また、「アクティブ・ラーニングワークショップ」も行われ、「アクティブ・ラーニングとタブレットPC(担当:ジェニース・ラスク准教授)」、「アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング(担当:モニカ・ハムチュク講師)」、「アクティブ・ラーニングとeポートフォリオ(担当:デボラ・オチ教授)」の三つの分科会を本学教員3名が講師となって行った。

- ・ **アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティス明確化**:11月から1月にかけてALWGの教員メンバーが15のクラス(授業)を参観した。また、各クラス担当の教員にもインタビューを行った。さらに、教員間で相互授業参観も行った。そして、「2015 アクティブ・ラーニングシンポジウム」で研究発表した際に得られたフィードバックも踏まえてALWGのミーティング(協議会)を開催し、議論を行った。
- ・ **アクティブ・ラーニングカンファレンスへの参加**:2月5日および6日にグレゴリー・ダン教授が米国バージニア州の高等教育研究に関するカンファレンスに参加し、情報収集を行った。

⑤ ルーブリックについての取り組み

- ・ **評価システム(アクティブ・ラーニング、英語スキル、クリティカル・シンキング)の構築**:本学教職員から構成されるルーブリック・ベース・シラバス・ワーキンググループ(RBSWG)によって、日英バイリンガルの環境下にある本学に相応しいルーブリックの研究が進められ、9月30日にRBSWG主催のFDを行った。
- ・ **ルーブリック評価システムの試行**:2015年9月30日と2016年3月6日に、ルーブリック・ベース・シラバスワーキンググループ(RBSWG)によるFDを開催し、本学教員のルーブリックに関する知識を深めた。特に、各教員が今後シラバスにルーブリックを導入するにあたっての疑問点・注意点などについて議論が行われた。

⑥ 平成27年の年次報告と外部評価委員会による評価

平成27年度のAP事業の進捗状況と成果を主とした年次報告を、平成28年3月25日にIR推進委員会に対して行った。また、平成28年3月30日に「平成27年度宮崎国際大学AP外部評価委員会」を開催し、本学のAP事業全般に関して、初めて外部評価を受けた。学外の有識者として、堀和郎 宮崎太陽銀行非常勤理事・筑波大学名誉教授、藤埴智一 宮崎大学准教授、林透 山口大学准教授の3名、本学の卒業生1名(現高校英語教諭)、本学在学生1名で、外部評価委員会が構成された。

平成28年度(2016)

① ルーブリック・ベース・シラバスの本格的運用

シラバスにルーブリックを組み込むルーブリック・ベース・シラバスの運用が国際教養学部において始まった。また、昨年度作成されたインスティテューショナル(全学的)ルーブリックの授業での活用も盛り込まれた(4月)。7月に、学生及び教員に対して、ルーブリック・ベース・シラバスの活用に関するアンケート調査を行った。ルーブリック・ベース・シラバス・ワーキンググループを中心として、本学におけるルーブリックの活用に関する中間報告書がまとめられた

(10月)。ループリック・ベース・シラバス・ワーキンググループを中心に、本学におけるループリック・ベース・シラバスの成果分析（評価・検証）が行われた（1～3月）。

② eポートフォリオについての取り組み

- ・ **eポートフォリオの教員向け及び学生向けオリエンテーションの実施**：4月にeポートフォリオに関するFDが行われ教員のe-ポートフォリオに対する知識が深まった。学生に対しては、6月、7月及び1月にオリエンテーションが開催されて、学生にeポートフォリオの使用法を指導し、eポートフォリオの活用をまとめた中間報告が作成された。これらによってより効果的なeポートフォリオ使用が大学全体で可能となった。
- ・ **国内の学会でのeポートフォリオ導入に関する発表**：東京のLakeland Collegeで開催されたGlobal Higher Educationの学会でeポートフォリオ導入に関する発表を行い、eポートフォリオに関する専門知識の共有をした。
- ・ **eポートフォリオの運用に関する評価・検証および見直し**：eポートフォリオ・センターを中心に、本学におけるe-ポートフォリオの運用に関する評価・検証を行った。

③ 平成28年度入学生へのタブレット端末の貸与

新入生に対しタブレット端末を貸与すると共に、その基本的な使用法についての説明会を開催した。

④ 宮崎国際大学クリティカル・シンキングテスト（MICCAT）の開発および試験的運用

昨年度に米国テネシー工科大学が開発したCATを実施したことで得た経験に基づいて、本学独自のクリティカル・シンキングテストの開発が行われた（5～10月）。

宮崎国際大学クリティカル・シンキングテスト（MICCAT）初版が作成され、国際教養学部1、3、4年生に対して試験的に実施された（10～1月）。12月、ワーキンググループの担当教員により本学独自のクリティカル・シンキングテスト（MICCAT）の開発と成果に関するFDが行われた。2月、クリティカル・シンキング・ワーキンググループを中心に、MICCATの成果分析（評価・検証）を行った。

⑤ アクティブ・ラーニングについての取り組み

- ・ **アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関するFDの実施**：第1回（7月）で、アクティブ・ラーニング・ワーキンググループが中心となり、全教員に対してアクティブ・ラーニングの効果的な手法についての講習を行った。第2回（11月）では、ベスト・プラクティスに関するFDが行い、教員間でアクティブ・ラーニングに関する知識を共有した。
- ・ **アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関するシンポジウムの開催**：11月12日に東京で、「2016 アクティブ・ラーニングシンポジウム」を開催した。アクティブ・ラーニンググループの発表「本学におけるアクティブ・ラーニングの可視化（担当：アン・ハワード准教授、カタリーナ・モーク講師）」を中心とし、「クリティカル・シンキング・テストの開発（担当：クリストファー・ジョンソン講師）」、「eポートフォリオを使ったアクティブ・ラーニングの成果の可視化（担当：アンデルソン・パソス准教授）」、「学修目標と学修成果測定のためのループリック（担当：ロイド・ウォーカー学部長補佐）」のすべてのワーキング

グループのこれまでの活動を発表した。その他にも、クリスマス教授による「アクティブ・ラーニングワークショップ」も開催された。

⑥ 平成 28 年度年次報告についての外部評価委員会

平成 28 年度の事業の進捗状況と成果の年次報告を行い、平成 29 年 3 月 24 日に「平成 28 年度宮崎国際大学 AP 外部評価委員会」を開催し、本学の AP 事業全般に関して、昨年度に引き続き、外部評価を受けた。外部評価委員会は、学外の有識者 3 名（林透 山口大学准教授、藤埴智一 宮崎大学准教授、中村清子 テレビ宮崎報道記者）、本学の卒業生 1 名（現高校英語教諭）、本学在学生 1 名で構成された。

平成 29 年度 (2017)

① クリティカル・シンキング・テスト (MIC CAT 第 2 版) の実施およびデータ分析

平成 28 年度に引き続き、4 月に国際教養学部 3 年生 (42 名)、7 月に国際教養学部 1 年生 (21 名) に対して CT テストを実施し、その後、結果分析を行った。11 月に国際教養学部 4 年生 (6 名) に対して、CT テストを実施し、その結果を分析した。2 月に、CT ワーキンググループが、これまで収集したテストのデータ及びその分析結果を発表する FD 報告会を実施した (参加教員数: 15 名)。1~3 月にクリティカル・シンキング・ワーキンググループを中心に、CT テストの成果分析 (評価・検証) を行い、より効果的なテストの改訂版作成のための議論がなされた。

② タブレット端末の貸与および e ポートフォリオのオリエンテーションの実施

5 月に、新入生 (平成 29 年度入学生) に対しタブレット端末を貸与するとともに、その基本的な使用方法についてのオリエンテーションを開催した。また、6 月に、e ポートフォリオの目的や使用方法に関するオリエンテーションを開催した (新入生オリエンテーション: 参加学生数 63 名、海外研修=セメスター留学参加者用オリエンテーション: 参加学生数 40 名)。

③ ルーブリック・ベース・シラバスの活用

5 月に、ルーブリック・ワーキンググループの教員が、これまでの取組の報告及び今後のシラバスに組み込まれるルーブリックのより効果的な活用法に関する FD を実施した (参加教員数: 22 名)。6 月に本学の教職員 2 人 (教員、職員それぞれ 1 人) を関西国際大学へ派遣し、同大学におけるルーブリックの活用状況の視察を行った。6~9 月、FD 報告会での教員からの意見や教員へのアンケート調査結果、また、関西国際大学視察から得た知見を基に、国際教養学部の DP ルーブリックの改訂を開始した。

④ アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する FD の実施

5 月に、AL ワーキンググループが、これまで本学で収集したデータ及びその分析結果を発表する FD 報告会を実施した (参加教員数: 22 名)。

⑤ e ポートフォリオについての取り組み

- ・ e ポートフォリオに関する学会 (広島大学) への参加: 本学が採用している e ポートフォリオのシステムである Mahara (マハラ) が「Mahara Open Forum」を 9 月に広島大学で開催

し、教員 2 人が参加した。

- ・ **e ポートフォリオの運用についての評価・検証**：今年度の e ポートフォリオ事業の管理・運用に関する評価・検証を行い、今後の e ポートフォリオのより良い活用法について議論した。2 月に、e ポートフォリオ・システムに関する学会（ムードルムート）に教員を 1 人派遣した。

⑥ アクティブ・ラーニングについての取り組み

- ・ **アクティブ・ラーニングに関する国際的な学会への参加**：カナダで開催の教授法と学習に関する国際学会である「International Society for the Scholarship of Teaching and Learning」に教員 2 人を派遣し、本学の AL への取組を発表した（10 月）。さらに、「American Evaluation Association Conference 2017（アメリカの評価専門の学会）」に教員 1 人が参加し、これまでの本学の取組全体について発表を行った（11 月）。
- ・ **アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する第 3 回目のシンポジウムの開催**：12 月に、シーガイア・コンベンションセンター（宮崎市）にて、AP の成果を発表するシンポジウムを開催した（参加者は内部関係者を含めて 60 名）。各ワーキンググループ（WG）が以下のタイトルで AP 事業の進捗状況を発表した。
 - アクティブ・ラーニング WG：「本学におけるアクティブ・ラーニングの調査」
 - クリティカル・シンキング WG：「本学でのクリティカル・シンキング測定及び教授法の改善」
 - ルーブリック WG：「学修目標と学修成果測定のためのルーブリック」
 - e-ポートフォリオ WG：「本学での e ポートフォリオの活用：これまでの取組及び展望」

⑦ ルーブリック・ベース・シラバスの e ポートフォリオへの導入

11 月に、e ポートフォリオ内でのルーブリックの活用に関して、教員間での共通理解を促すための FD を行った（参加教員数：17 名）。今年度のルーブリック・ベース・シラバスの成果分析（評価・検証）を行い、今後のルーブリック・ベース・シラバスのより良い活用法について議論した（1～3 月）。

⑧ 平成 29 年度の年次報告書を作成し、外部評価委員会による評価

「平成 29 年度宮崎国際大学 AP 外部評価委員会」を平成 30 年 3 月 23 日（金）に開催し、本学の AP 事業全般に関して外部評価を受けた。外部評価委員会は、学外の有識者 3 人（林透山口大学准教授、坂本ロビン杏林大学教授、中村清子テレビ宮崎報道記者）、本学の卒業生 1 人（現高等学校英語教諭）、本学在学生 1 人、計 5 人で構成された。

平成 30 年度（2018）

① アクティブ・ラーニング（AL）のアンケートの実施

平成 30 年度は、教育学部においても AL の利用実態に関するアンケート調査を実施し、大学全体での AL の実態を把握することができた。調査を通じて、教員は自分の使用している AL の手法を鑑みることができ、授業で使用している AL の頻度、及びその学修効果について考える良い

機会となった。更に、本学の開学以来の教育目標である「AL による CT 能力の育成」の実現に向け、特定の CT 能力を伸ばす AL の手法に関する FD 研究会を開催した。この FD 研修会では、教員は特定の CT 能力を育成するための AL の実践方法を学び、AL の実践的指導力が上がった。また、教員全体の AL の実践力の向上のため、本学で実践されている AL の指導例を効率的に収集・共有する「AL ホームページ」を立ち上げ、いくつかの実践例を掲示することができた。さらに、学生グループによって、「AL に効果的に取り組むための学生の心得」の冊子が作成された。本冊子では、AL の授業に対する効果的な受講方法、予想される困難とその対処法、および、得られる学修効果が学生の視点でまとめられ、本事業の効果は、学生にも確実に波及した。

② クリティカル・シンキング・テストの実施

計画に従い CT テストを実施し、その結果の検討・分析を行いテスト改善のためのデータを得ることができた。また、前述した通り、CT 能力の育成に焦点を当てた AL の手法に関する FD 研修会を実施した。CT テスト開発の進展状況を教員間で共有し意見交換することで、CT テストに対する教員の理解を深めるとともに、テストが測定する CT 能力と授業の AL で育成する CT 能力を対応させることができた。

③ ディプロマ・ポリシーの学生自己評価の実施

今年度は、DP で示した教育目標の達成のためのシステムを利用し、学修成果の可視化への取組を推進することができた。具体的に、平成 30 年度の国際教養学部の新入生全員に対して、40 項目に対する自己評価を実施し、本学 DP の教育目標を周知するとともに、入学時点での DP に対する到達度を測定した。また、年度末には、国際教養学部の全ての学年の学生が 40 項目の自己評価を行った。更に、教員は各授業で育成する 40 項目を特定し、授業科目で扱う DP の項目を明確にし、授業内での DP の能力育成に向けた授業展開ができるようにも取り組んだ。

④ e ポートフォリオの活用

e ポートフォリオシステム（ムードル及びマハラ）を完成させた。教員に対する e ポートフォリオの使用法に関する FD 研修が行われた。国際教養学部 1 年生の学年末ページのオリエンテーション及び国際教養学部 2 年生への留学オリエンテーションを開催して e ポートフォリオの活用方法を周知した。学生はそれぞれの用途に合った e ポートフォリオを作成し、学修を振り返ることができた。リベラル・アーツ入門、世界市民、ICT 入門、キャリアデザイン、一部の英語の授業では AL のエビデンスを含めた e ポートフォリオを導入した授業が行われた。また、重要な英語力をまとめるページを導入した。このページでは、語彙力や TOEIC の点数などの英語力を学生自らが管理し、英語力の進捗に対する振り返りを実施することで、主体的な学修を促進している。国際教養学部 2 年生の留学ページも導入された。これまでの本取組は低学年における e ポートフォリオの活用がその中核となっていたが、本学での 4 年間の学修を通じた有効活用を目指し、3 年次のまとめページ及び 4 年次の卒業論文ページの開発を行った。さらに、DP で定められた学修成果を可視化するためのレーダーチャートなど、更なる e ポートフォリオ活用の準備を進めることができた。

⑤ アクティブ・ラーニング事例集の作成

教員が授業で使用している AL の手法の実践事例を集め、CT 能力及び英語力に焦点を当てた AL の事例集を作成した。また、事例集をホームページ上で学内共有することで、教員の AL の実践力を向上させる仕組みを整備した。

令和元年度（2019）

① アクティブ・ラーニングの可視化

英語スキル（読む、書く、聞く、話す、語句と文法）に対するアクティブ・ラーニング（AL）手法の効果を、学生アンケートで検証した。その結果、文字を通じて学習をする「読むと書く」は、同様の挙動を示した。「クリエイティブ・ライティング、ジャーナル・ライティング、リアクション・ライティング」「言い換えや要約の記述」「卒業論文やリサーチペーパー」「作文についての筆記による相互評価」「読解」などが“文字を通じて学習”に対して効果的な AL 手法であり、「自己評価」「ディベートやパネル討論」「創造的な朗読」は効果的でないことが分かった。また、声を通じて学習する「話すと聞く」の英語スキルは同じ挙動を示し、「アクティブ・リスニング」「口頭での言い換えや要約」「インフォーマルなディベート」「質問に対するグループワーク、ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア」が効果的な AL 手法であり、「言い換えや要約の記述」「卒業論文やリサーチペーパー」「作文についての筆記による相互評価」「読解」「ジグソー・アクティビティー」の効果が弱いことが分かった。語彙と文法は、「書く・読む」の英語スキルと同時に学習することが多いので、「語彙と文法」の学習に効果的な AL 手法は、「書く」と読む」の英語スキルの最適 AL 手法に似ていた。これらの結果に基づけば、効果的な AL 手法を使った英語授業が、学生にとって学びやすい最適な AL 手段（ベストプラクティス）になると思われる。

さらに、クリティカル・シンキングに対する AL 手法の効果についても、4 年生学生にアンケート調査を行った。その結果、各評価項目の平均点が 3.16 から 3.64 の 0.48 ポイントの差の中にあり、大きな差異が見られなかった。そのために CT に有効な AL を特定することができなかった。その中で、偏差値が 60 を超えている AL である「ファシリテートされたディスカッションや自由討論」「ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア」などが、学生にとって学びやすい最適な AL 手段（ベストプラクティス）とした。“討論”や“グループ・ワーク”を学生が有効と考えていることが分かった。

② アクティブ・ラーニング事例集の作成

クリティカル・シンキング及び英語スキルに焦点を当てたアクティブ・ラーニングの指導事例を国際教養学部および教育学部の 2 学部の教員から収集して、冊子と HP で公開した。さらに、令和元年 11 月 29 日にアクティブ・ラーニング手法を地域の小学校、中学校、高等学校に波及させるために、「宮崎国際大学 英語教育セミナー：小中高大におけるアクティブ・ラーニングの事例発表」を開催し、小中高の英語教育担当者によるアクティブ・ラーニングによる英語教育の事例発表と本学モック准教授による宮崎国際大学のアクティブ・ラーニングの模擬講義を行った。65 教育機関から 112 名の参加があった。

③ クリティカル・シンキングの可視化

クリティカル・シンキング・テストは英語で 26 問作成され、学生は 4 つの選択肢から正しいものを選んで答える。同テストは、国際教養学部 1 年生に対して 7 月に、3、4 年生に対しては 11 月に実施した。2 年生は留学期間中であることから実施されていない。テストの結果、得点分布が正規分布を示していることから、テストの難易度が中程度であることが分かった。CT テストの平均点は、1 年生時の 9.9 から 4 年生では 13.9 まで学年が進むにつれて平均点が上昇した。このことから、CT 能力が高学年になるにつれて向上していることが分かった。

④ DP の学生による自己評価

希望する新入生にタブレット端末を貸与すると共に、その基本的な使用法についての説明会を開催した。e ポートフォリオの目的や使用方法の指導を行う e ポートフォリオ・オリエンテーションを国際教養学部 1 年生及び 2 年生に対し実施した。また、必要に応じて、適宜、e ポートフォリオの指導を e ポートフォリオ・センターで実施した。国際教養学部の新入生に対して、本学の DP で定められた学修目標を説明し、自己評価を行うオリエンテーションを開催した。自己評価で活用している DP ルーブリックを成績評価と関連づけ、自己評価と成績評価の 2 つの側面から、学生の DP で示した教育目標の達成を測定する仕組みを構築した。

⑤ DP ルーブリックの達成度評価システムの構築

今まで e ポートフォリオに活用している本学の Mahara®に、学生の自己評価と学生の成績の両面からディプロマ・ポリシーの達成度を測れるプラグイン機能を付与した。これらのデータを卒業生に交付した「学位証書補足資料（ディプロマ・サプリメント）」に反映させた。

⑥ AP 事業継続のための学内ワークショップの開催

FD 研修会（第 5 回 AP-FD、7 月 26 日）、第 4 回 FD 研修会（9 月 17 日）、FD 研修会（第 6 回 AP-FD、1 月 14 日）をそれぞれ開催し、AP 事業の進捗を学内に報告した。また、BEVI 研修会（第 5 回 AP-FD、1 月 10 日）を開催して、留学の効果を可視化する方法について検討を行った。

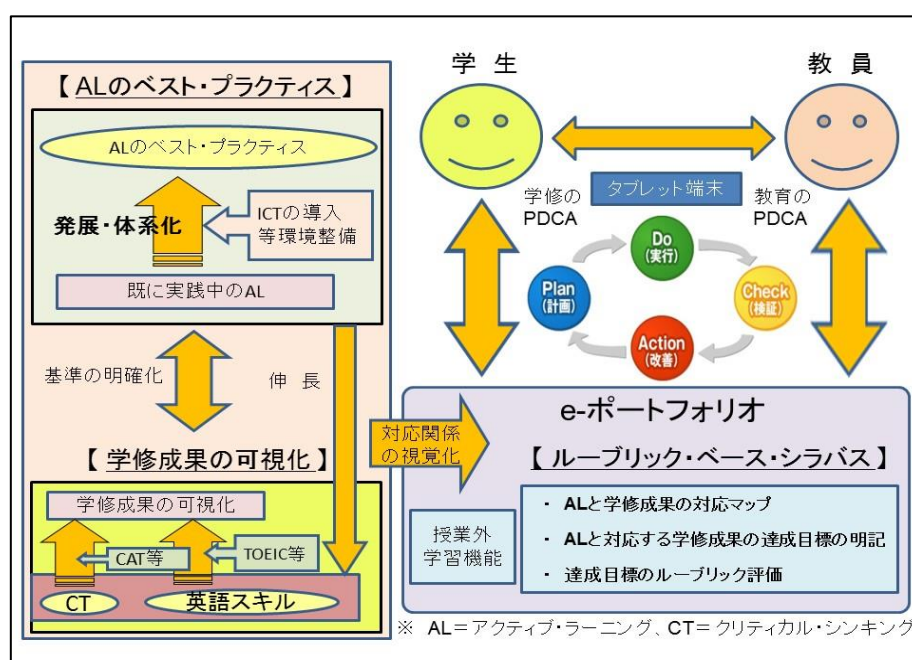
⑦ AP 事業合同発表会の開催

「AP 事業北九州合同セミナー」を令和元年 11 月 11 日西日本展示場会議室（北九州市）で、九州・山口地区の六校（崇城大学・北九州市立大学・山口大学・宮崎国際大学・日本赤十字九州国際看護大学・鹿屋体育大学）で合同開催して、AP 事業の成果についての発表および意見交換を行った。AP 幹事校である京都光華女子大学短期大学部のお世話で「AP 全体報告会」が令和 2 年 3 月 6-7 日に武蔵野大学有明キャンパスで予定されていましたが、新型コロナウイルスのために、開催が中止された。当校から発表予定だった要旨はオンラインで情報発信されることになった。また、本学の AP 事業の取組の成果をまとめた最終報告書を作成し、関係諸機関へ送付した。

5. AP 事業の目標達成

宮崎国際大学の AP 事業の具体的な目標は、以下の 5 つであった。6 年間の成果と目標の達成度を下記に示す。

- ① AL のベスト・プラクティスの明確化と発達
- ② CT を客観的に測定・評価するツールの開発
- ③ 英語スキルを向上させる AL プログラムの構築
- ④ e ポートフォリオを用いた学修成果の可視化
- ⑤ ルーブリック・ベース・シラバスの導入による学修 PDCA サイクルの確立



- ① AL のベスト・プラクティスの明確化と発達
- ③ 英語スキルを向上させる AL プログラムの構築

2015 年度に、33 のアクティブ・ラーニング (AL) 手法を確立し、5 つのカテゴリーに分類をした。詳しい内容を本学の Mork Cathrine-Mette, Howard Anne McLellan 教員によって宮崎学園図書館学術リポジトリ (<http://id.nii.ac.jp/1106/00000475/>) に報告した。2017 年度には国際教養学部の教員 27 名の担当授業について AL 使用頻度を「毎回、週 1 回、月に数回、学期中に数回、ほとんど用いない」の 5 段階に分けて、アンケート調査を行った。2019 年度には英語スキル (読む、書く、聞く、話す、語句と文法) に対する AL 手法の効果の検証を 115 名の学生に対するアンケート調査で行った。その結果、学生にとって学びやすい最適な AL 手段 (ベストプラクティス) を見出すことができた。

7 つのクリティカル・シンキング (CT) 要素に対する AL の効果についての学生アンケートを実施した。各評価項目の平均点に大きな差異が見られず、各 CT 要素に有効な AL を特定するこ

とができなかったが、学生にとって学びやすい最適な AL 手段（ベストプラクティス）は「ファシリテートされたディスカッションや自由討論」「ペアで考えてシェア・グループで考えてシェア」などの“討論”や“グループ・ワーク”であることが分かった。

また、2018 年度には、学生グループによって、「AL に効果的に取り組むための学生の心得」の冊子が作成された。本冊子では、AL の授業に対する効果的な受講方法、予想される困難とその対処法、および、得られる学修効果が学生の視点でまとめられ、本事業の効果は、学生にも確実に波及した。さらに、2018 年度と 2019 年度にクリティカル・シンキングと英語力に焦点を当てたアクティブ・ラーニングの指導事例を教員から収集して「アクティブ・ラーニング事例集」を作成し、冊子とホームページで公開した。

2019 年度に「宮崎国際大学 英語教育セミナー：小中高大におけるアクティブ・ラーニングの事例発表」を開催し、65 教育機関から 112 名の参加があった。ここでは小中高の英語教育担当者によるアクティブ・ラーニングによる英語教育の事例発表と本学モーク准教授による宮崎国際大学のアクティブ・ラーニングの模擬講義を行った。アクティブ・ラーニング手法を地域の小学校、中学校、高等学校に波及させることに貢献した。

② CT を客観的に測定・評価するツールの開発

2014 年度に、クリティカル・シンキング・アセスメントテスト（CAT）開発の先進校である米国テネシー工科大学のワークショップに参加して、CAT を開発したテネシー工科大学の担当者と情報交換を行った。また、CAT を実施するためのトレーニングを受け、日本で CAT を実施する資格を得た。2015 年度に CAT で得た経験に基づいて、本学独自のクリティカル・シンキングテスト（MIC CAT）を開発した。2017 年に国際教養学部学生に対して試行を行い、改訂版（MIC CAT 改訂版）を完成した。完成した MIC CAT 改訂版は、英語で 26 問作成され、学生は 4 つの選択肢から正しいものを選んで答えるテストになっている。同テストは、2018 年および 2019 年度に国際教養学部の 1 年生と 3、4 年生に対して実施した。2 年生は留学期間中であることから実施されていない。テストの結果、得点分布が正規分布を示していることから、テストの難易度が中程度であることが分かった。CT テストの平均点は、学年が進むにつれて平均点が上昇し、CT 能力が高学年になるにつれて向上していることが分かった。これらから、CT を客観的に測定・評価するテストを開発することに成功した。

④ e ポートフォリオを用いた学修成果の可視化

2014 年にソフトウェア Mahara を活用した e ポートフォリオ・システムを構築した。2015 年度に e ポートフォリオ・センターを開設して、本事業で購入したタブレット端末を貸与して、その使用方法などのオリエンテーションを学生に対して実施した。タブレット端末の保有台数は 245 台、2019 年 10 月現在の貸出台数は 137 台であり、貸し出し率は 56%（ $=100 \times \text{貸出台数} \div \text{保有台数}$ ）となった。在籍学生数は 504 名（内訳 国際教養学部 334 名、教育学部 170 名）の内、27.6%（ $=100 \times 139/504$ ）の学生にタブレット端末を貸与していることになる。

e ポートフォリオでは、語彙力や TOEIC の点数などの英語力を学生自らが管理し、英語力の進捗に対する振り返りを実施することで、主体的な学修を促進している。留学報告のページ、語彙

力や TOEIC の点数などの英語力を学生自らが管理して英語力の進捗を振り返るページなどを組み込み、e ポートフォリオ活用を推進した。2018 年度に 3 年次のまとめページ及び 4 年次の卒業論文ページも組み込まれた。また、リベラル・アーツ入門、世界市民、ICT 入門、キャリアデザイン、一部の英語の授業では AL のエビデンスを含めた e ポートフォリオを導入した授業が行われた。さらに、2019 年には、e ポートフォリオに DP で定められた学修成果を可視化するためのレーダーチャートなども組み込まれた。これらによって、e ポートフォリオを活用して学修成果を可視化することに成功した。これらの学修成果を記した「学位証書補足資料（ディプロマ・サプリメント）」を学位記授与の際に手渡した。

⑤ ルーブリック・ベース・シラバスの導入による学修 PDCA サイクルの確立

2017 年度に、5 つのディプロマ・ポリシー（DP）にそれぞれ 8 つの DP ルーブリックを設けて、40 項目の DP ルーブリックを作成した。教員が担当授業で受け持つ DP ルーブリックを決め、授業科目毎に DP ルーブリックを集約して、カリキュラム・マップを作成した。2019 年度は Mahara® にディプロマ・ポリシーの達成度を学生の自己評価と学生の成績の両面から測れる機能を付与した。各学生の DP の達成度を記したディプロマ・サプリメント（学位証書補足資料）を、卒業時に学生に授与した。本事業で構築した e ポートフォリオとカリキュラム・マップの導入によって、PDCA の Check にあたる自己評価・客観評価を構築することができた。このようにして、シラバス（Plan）→授業（Do）→学生および教員の自己評価・客観評価（Check）→組織的な改善（Action）の PDCA 教育改善システムが完成した。

編集後記

この報告書は、文部科学省大学教育再生加速プログラム事業（AP） テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・テーマⅡ（学修成果の可視化）複合型に採択された本学プログラムの最終年度（令和元年度）および6年間の取組をまとめたものです。

宮崎国際大学は、平成6年度の開学以来、建学の精神である「礼節・勤労」の人材養成方針に基づいた国際的リベラル・アーツ教育を軸に、先進的にアクティブ・ラーニング（AL）を取り入れた高等教育を実施してきました。本学のAPプログラムでは、伝統的に実施してきたALを発展させることを目的として、ALを体系化し、学修効果を明確にした効果的なALの提示・普及を目指しました。その結果、ALのベスト・プラクティスの明確化と発達、クリティカル・シンキングを客観的に測定・評価するツールの開発、英語スキルを向上させるALプログラムの構築、eポートフォリオを用いた学修成果の可視化、ループリック・ベース・シラバスの導入による学修PDCAサイクルの確立などの成果を収めることが出来ました。

今後、本プログラムが本学だけの取組に留まらず、地域の小中高大へ波及されるように一層努めたいと思います。今後ともご支援をよろしくお願い致します。

文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP） テーマⅠ・Ⅱ複合型 アクティブ・ラーニング・学修成果の可視化 令和元年度（最終年度）報告書	
発行日	令和2年3月9日
発行者	宮崎国際大学 〒889-1605 宮崎県宮崎市清武町加納丙 1405 番地 TEL：0985-85-5931
問合せ先	宮崎国際大学 AP事務局 アセスメント・オフィサー 保田 昌秀 AP事務補佐 西中 雅栄
印刷	株式会社 宮崎南印刷

本書に記載された記事の無断転載・複製を禁じます